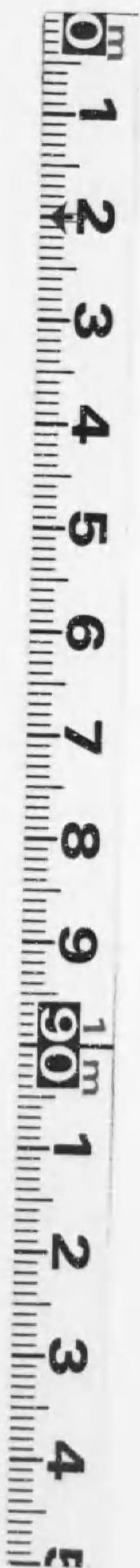


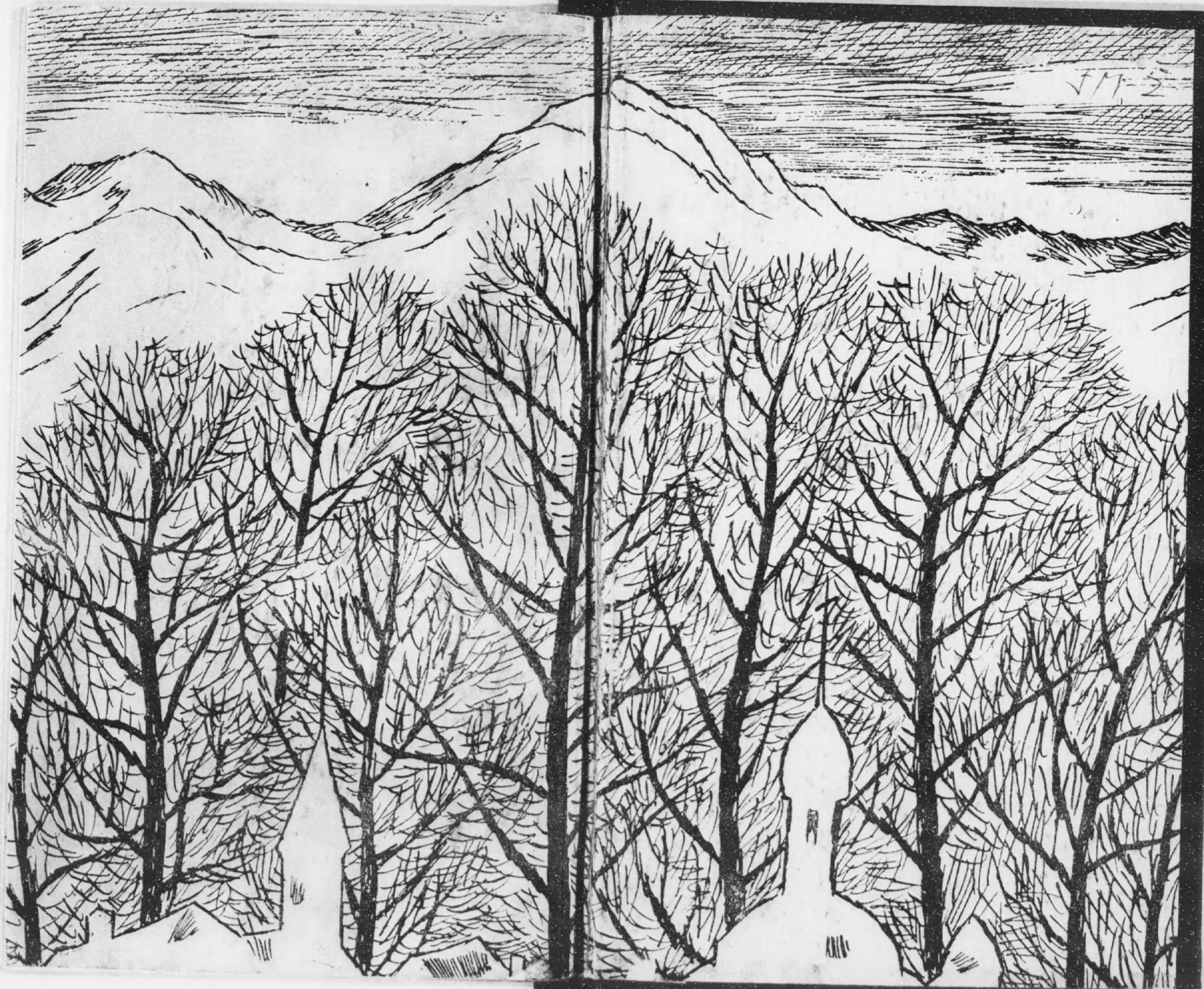
500

53



始





J.M.-2

HM-2

500-53

お 耶
釋 蘇
迦 様
様 と



第一法師叢書





はしがき

「二十世紀は兒童の世界である。」

これはエレン・ケイ女史の言葉である。それは、もはや耳新しい言葉ではない。

然し、この意味深い女史の言葉が、北歐の一角に放たれてから爾餘幾十年、兒童に關する研究は科學的にも、藝術的にも如何に目覺しく勃興したことであらうか。たゞに歐米のみではない、我が國に於ても、近來兒童のために諸般の研究資料が提供され、論

議されつゝある。そして今日、それと同時に児童達の讀物が非常に多く刊行される。

勿論、これは一の文化運動である。そこには明白な意義と理想とが存してゐる、即ち児童のための讀物は、児童のために、かくてまた人類のために必要な、不斷な努力の集成であらねばならない。然るに、流行的刊行物の弊害は、時今漸く多からうとする傾向が無くはないか。けれど、これが今度、本社出版部から本叢書の刊行を敢て企てた所以である。

幸にして、この慾求が、正しい意味の児童教育に與かるを得ば満足である。

なほ、本叢書の編纂に就いては、金子洋文氏の多大な助力を深く感謝するものである。

實業之日本社出版部

目次

イエス様のお話

一 イエス様の誕生……………二

ユダヤの國——大工ヨセフと妻の MARIA —— 厩小屋でお産——牧者と老人と博士の豫言——ヘロデ王の虐殺

二 大工となつたイエス様……………一九

ヨセフ一家の貧乏——十二歳の時イエス様大工となる——労働は

耶穌様とお釋迦様

二

正しい神の掟——富める者をいましめたイエス様の言葉

三 野の修行……………二九

野に叫ぶ人あり——ヨハネとイエス様の會見——悪者のいたづら

人はパンのみにて生きるものにあらず

四 豫言者とその故郷……………四一

ユダヤ人の宰とイエス様の會話——水をくむサマリヤの女——故郷を追出されたイエス様

五 皇帝のものは皇帝に歸し神様のものは神様に返せ……………五〇

忘者と高慢な學者と無慈悲な繼母——悪人達のたくらみ——罪深

い女——罪なき者その女に石を投つべし——皇帝のものと神様のもの

六 放蕩息子の話……………七一

田舎をきらつて都へ飛出した次男——都の悪い生活——後悔して故郷に歸る——父親の歡びと祝宴——神様と子供の生活

七 十字架になつたイエス様……………八二

危険次第に迫る——イエス様を三十金で賣つたユダ——イエス様弟子の足を洗ふ——最後の晚餐——ゲツセマネの園の祈り——天國にのぼつたイエス様

お釋迦様のお話

一 お釋迦様の誕生……………九六

樹の下で御誕生——仙人の豫言——太子の悩み——四ツの門と人間の苦しみ——太子の家出

二 新しらい生活へ……………一〇九

頭を剃つて出家となる——跋迦婆仙人との問答——五人の弟子——阿羅邏仙人との問答

三 苦行六年の後……………一三三

苦行に對する疑——自然の教——五人の弟子去る——遂にさとりを開く

四 五人の弟子と再會……………一六

五百人の商人の群——五羽の小鳥の話——人間がまぬがれない八つの苦しみ

五 富豪の子が出家となる……………一四〇

亂らかな宴會のありさま——耶舎の家出——佛弟子となる——父の悲嘆——佛敎四方にひろまる

耶穌様とお釋迦様

六

六 お釋迦様の歸國

..... 一五二

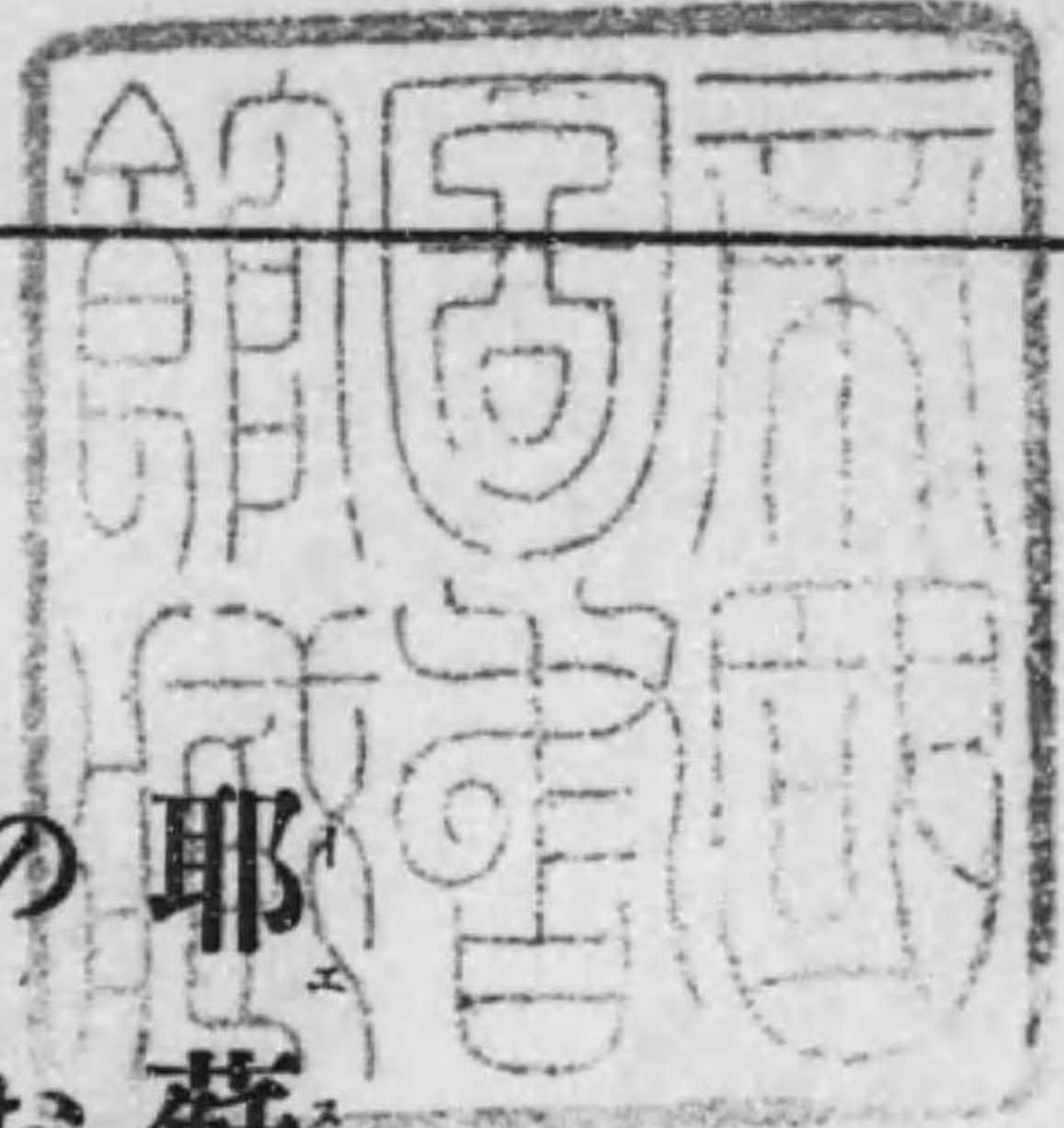
父君のお迎へ——姫者の悲しみと恨み——姫君との對面——お釋
迦様の教全國にひろまる——國難來る——他を苦しめる者はやが
て自分も苦しむ

七 盲人と象の話

..... 一五四

象に追はれた男——子供を失つた女とお釋迦様——盲人の争ひ——
萬燈より明るい貧しい女の一燈——お釋迦様の往生

——目次終——



の耶穌
お蘇
話様

——神は愛なり——



一 イエス様の誕生

ユダヤの國—大工ヨセフと妻の
マリヤ—厩小屋でお産—牧者と
老人と博士の豫言—ヘロデ王の
虐殺

今から四千年も昔のことです。アジヤ
の西の端にユダヤといふ國がありまし
た。日本の四國位の小さな國でしたが、
大變信仰のあつた國でした。

今はユダヤ國は他國に奪はれて國はありませんがユダヤ人は到る處の國に
住んでゐます。

ユダヤ人の先祖はアブラハムといふ人でした。それから千年たつてダビテ
といふ人があらはれて、牧者から身をおこしてその國の王様となりました。
けれ共その子のソロモンといふ王様があまり榮華をきはめたので、間もなく
國は南と北の二つに別れて、争ふことになりました。

國は次第に亂れ初めました、その隙をねらつて外國からはどん／＼せめた
てられました。ユダヤ人は全く手も足も出なくなりました、そして國民は殺
され、あるひは敵の捕虜となつて、終にローマの屬國となつてしまひました。
國民はまるで恐しい夢の中に住んでゐる様な氣がしました。父を殺されて
泣き悲しむ親子、夫を失つて首をくゝる妻、子を奪はれて路頭に迷ふ老人、

それは見るもあさましいありさまでした。これが昨日まで榮華をほこつたユダヤの民であるとは、何うしても考へられませんでした。

人々は初めて眼がさめました、そして自分達が神様を忘れてわがまゝな、ぜいたくな生活をつけて来たことに氣づきました。今は、たゞ神様のお手にすがつて、救ひを求めようより仕方がなかつたのでした。

忘れられてゐた寺の門は毎日のやうに開かれました、國を失つたあはれな人々は、毎日のやうに寺につめかけて、神様にお祈りするのでした。

『神様、どうぞ私達に救ひの主をつかはして下さい、そしてあはれな民を救つて下さい。』

かうして國が奪はれ、人々が悲嘆にくれてゐた眞最中、イエス様はお生れになつたのです。

二

今から千九百餘年前のことです。ガリラヤのナザレの村にヨセフといふ一人の大工が住んでゐました。正直な働くことのすきな男で、毎日朝早くから日の落ちるまで、低聲で唄をうたひながら、コツ／＼仕事をしてゐました。

ヨセフの妻をマリアと言ひました。やさしい心を持つた、可愛らしい田舎の女でした。そして考へることは、神様のありがたいことと、今晚はどんな御馳走をこしらへて夫を喜ばせてやらうかと、いふことばかりでした。

夫が仕事を終へて歸つて来ると、マリアはすぐとびついて接吻してから、二つの手を夫の眼にあてて小さく叫びます。

『いゝえ、臺所をのぞいてはいけません、さあ、今日の御馳走は何だかあて

てごらんなさい。」

『さうさな、』とヨセフはうれしさに鼻をうごめかしながら言ひます。『これはいゝ匂だ、羊の焼肉だらうあはゝゝゝ』

二人は睦しく話しながら食卓につきます、食卓には羊の焼肉なんかある譯はありません、大抵はまづさうな野菜の料理ばかりでした。けれ共二人はまるで上等の料理を食べてゐる様に、うまい〜と言つてゐました。

若い夫婦の仲があまり睦じいので、悪い仲間がヨセフが仕事をしてゐるところにやつてきてこんなことを言ひました。

『ヨセフさん、お前のおかみさんは仲々別嬪だね。』

『それはさうだ。』と、ヨセフは手を動かしながら答へました。

『だが、顔のきれいな女の心には、大抵悪魔が住んでゐるものだよ。』

『そりや、そうだ。』と、ヨセフは答へました。

『だが、私の家内には神様が住んでゐるよ。』

『お前さんはさう信じてゐるのかい、』と悪い奴は眼を光らして言ひました。

『マリアさんの心に住んでゐる、悪魔を見たといふ人があるよ。』

『ほう、それは本當か。』

『本當とも、マリアは悪い女だよ、お腹の子供は、お前の子供ぢやないよ。』

『やれ、やれ、その人はきつと自分の心の悪魔を見たのだらう、マリアの子供が私の子供でなかつたら、それは神様のお子様だらう。』

そしてヨセフはのんきさうに唄をうたひ出しました。悪い奴は、とう〜腹をたてて歸つてしまひました。

ヨセフは悪い奴の告げ口などは耳にもかけませんでした、そしてマリアを

いつもと同じやうに愛してゐました。

丁度その頃、ローマのアウグスト王様から戸籍調査のきびしいひつけがあつて、他所に行つて働いてゐた人達は、一應自分の生れた所へ歸つて、それ／＼手續をしなければなりませんでした。

そこでヨセフは身重な妻の手を取つて、南の方へ三十二三里はなれてゐる、ユダヤのベテレヘム村に歸つて行きました。

ベテレヘムの村の端まで来た時は、赤い陽はすつかりかくれて、村には燈がキラ／＼輝いてゐました。不便な遠い旅をつゞけてきたので、身重なマリヤはすつかり疲れてゐました、夫の肩に半分身をもたせかけて、時々立止つては太い、苦しい吐息をもらすのでした。

『マリヤ、もう少しの辛棒だよ。』と、ヨセフはマリヤの黒い髪をなでながら

言ひました。

『私苦しいの、そしておなかがチク／＼痛みますの。』

『ホラ、向ふを御覽、燈が見えるだらう、すぐだよ、宿へ着いたら氣持のいい室をとつてもらつてお前を休ましてあげるよ、だから、もう一つ元氣を出して、あすこまで歩いて行つておくれ。』

村に着いた時、二人は宿屋の明るい料理場で、羊の肉を焼く、油の香ひをよく感じました。

『御免なさい。』と、ヨセフは宿屋の戸口に立つて叫びました。『今晚御厄介になりますよ。』

けれ共、駄目でした、時が時なので宿屋は満員で一つの室もあいてゐませんでした。

次から次へ、所々の宿屋をおとづれたのですが、何處でも『お氣の毒様』といふ言葉をきくだけでした。どうにも仕方がなかつたので、ヨセフはある宿屋の庭隅にたつてゐた厩をかりて、そこで寂しい一夜を明すことにしました。

汚ない厩を掃除して寢臺をつくると、マリアは死人のやうにそこへ倒れてしまひました、そして時々苦しいうめき聲を發してはヨセフの名を呼ぶのでした。

太つた、鼻の大きい宿屋の亭主が、怠ける下男を叱りとばしたり、つまみ喰をしてゐる下女をたゞきつけたりして寢床にはいつたのは一時過ぎでした。彼はすぐ雷のやうな駟を出して昵りにつきましたが、丁度、戦争の夢を見て、敵に捕はれて殺されかけやうとした時、あはてた呼聲でびつくりし

て眼をさましました。

『御亭主、お氣の毒ですが一寸起きて下さい、家内が産氣づきましたが、何卒急いでお醫者様を呼んで来てくれませんか。』

『そりや大變だ。』と、亭主ははねとばされたやうに寢床をすべり下りました、『やれ、やれ、おかげで生命は助かつた……あゝあなたは厩におとまりになつたヨセフさんだね、あかみさんが産氣づきましたか。』

下男も下女もたゞき起されました、醫者は呼びにやられました、かうしたあはたらしい中に、マリアは、厩の中で可愛らしい男の子を生み落しました。

三

人々がほつと安堵の胸をなでおろした時でした、厩の戸を禮義正しくうつ

人々がありました。ヨセフが戸口に出て見ると、それに見なれない數名の人々が頭をたれて立つてゐるのでした。

「何御用ですか。」と、ヨセフは不審に思ひながらたづねました。

「私等はベテレヘムの村外れに住んでゐる牧者でございます、今宵私達は神様のありがたいお告げをきいたのでございます。」

「神様のお告げ」と、ヨセフはびつくりして反問ねました。

「さうです、神様は今宵私達に救主をおつかはしになつたのです、私達はその救主を拜みたい爲に參つたのでございます。」

ヨセフは、全く何う言つて答へていゝか判りませんでした、たゞくあつけにとられて、それ等の牧者を廐の中にみちびきました、牧者達は槽の中に布で包まれてゐる赤坊を見て、神様の名をたゞへて、しづかに歸つて行き

ました。

夫婦はこの不思議な牧者の見舞を喜んで、赤坊の名をイエスと名づけました、(イエスといふのはギリシヤ語で、日本語に譯すと、救主といふ意味です。)

赤坊が生れて四十日目に、ヨセフとマリアは、その頃のならばしに従つて、赤坊を抱いて、エルサレムといふその國の首都に參りました。そしてお寺に參詣して赤坊のために獻身式を行ひました。

二人がお寺を出て歸らうとした時、二人の老人に呼びとめられました。

「どなた様でございますか。」とマリアは言ひました。

「私はシナオンと言ひます。」とお爺さんの方が言ひました。

「私は連合のアンナでございますよ。」と、お婆さんはニコ／＼笑ひながら申

しました。

「本當にいゝお天氣でございます。」と、マリアは赤坊をあやしなから再び言ひました。

本當に、ありがたい神様の思召でございます、何卒、神様がおつかはしになつた救主を二人の老人にをがまして下さい。」

かう言つてシナオンとアンナは、イエスの行末を祝ひました。

「これで二度目だよ。」と、二人の老人に別れて、途々考へに沈んでゐたヨセフは言ひました。

「何ですか。」

「初めは牧者達、二度目は二人の老人……」

「何ですか。」と、マリアは再びたづねました。

「この子が神様のつかはされた救主だと言ふことだよ。」

「まあ、勿體ない、私のやうな愚かな女に、何うして神様がおつかはしになつた救主が生れますものですか。」と、マリアは笑ひながら言ひました「イエス、さあ、お笑ひなちやい、お前さんはお母さんの赤ちやんなの、それ共神様がおつかはしになつた、おえらい方なの、……ほう笑つた、やはりお母さんの赤ちやんね。」

「私は何だか恐しい氣がして來たよ。」と、ヨセフはつぶやきました。

不思議な豫言はそればかりではありませんでした。二人がエルサレムからベテレヘムに歸つて來ると、今度は東の方の三人の博士が、ヨセフの家をおとづれてきました、この三人の博士は天の星を眺めて、人間界の出來事を占ふ學者でしたが、丁度イエスがお生れになつた時、不思議な星があらはれた

のを見つけました。三人はいろいろ研究した結果、これはユダヤの王様となるえらい方がお生れになつたのだといふことを知りました、そこでその星を目あてに、はる／＼數百里の東の國から、ベテレヘムにたづねて來たのでした。

三人の博士はイエスの顔を見ると、自分達の占が正しかつたことを今更に知りました。

『何分この方を大事に育て、下さい、この方は神様がおつかはしになつた救主です、人間の罪はこの方に依つて初めて淨められるでせう。』と言つて、東の國に歸つて行きました。

ヨセフとマリアの心は全くおどろきにみだされてしまひました。二人は勿體ないと思ひましたが、最早そのことを欺ふことが出来ませんでした。それ

でイエス様を大事に育てあげることにもつばら心をそゝぎました。

不思議なこの噂は人々の唇から唇へ、風から風にはこばれて、バツとひろがりました。

その噂は貧乏人の家には暖かい太陽の光にのつて入つて行きました、華美に飾られた尊い人達の宮殿へは、寒さと一所はいつてに行きました。

當時、ローマ皇帝の命令をうけて、ユダヤ全國を支配してゐたのは、ヘロデ王でした、このヘロデ王は名高い無慈悲な王様で、自分の氣に入らない時は、人間を大根でも、きるやうに殺してしまふのでした。

『うるはしいお天氣でございます。』と家事が言つても、御自分の心の天氣が悪いと、『無禮者奴ツ』と叱りとばして、すぐ牢屋に縛りつけて了うのでした。不思議な博士の評判はこの恐しい心のヘロデ王の耳にもはりました、す

ると彼はすぐさま兵士に向つて、ベテレヘム村の二歳以下の赤坊を、全部刺殺してしまふことを命じました。

恐しい血の雨が、ベテレヘムの村を襲ふて來ました。悲しいうめき聲が村にあふれました、赤坊の死骸を抱いて川に飛び込む女、赤坊と一所に逃げるところを背から鎗にさしつらぬかれた女、それはく眼もあてられぬ恐しいありさまでした。

だが、この様な残酷なヘロデ王のにくしみも神様の慈悲には勝つことが出來ませんでした。その騒ぎのあつた時、ヨセフとマリアはイエス様を連れて、前以て埃及の國に避難してゐたのです。

かうしてイエス様は神様のお慈悲をうけて、無事に赤坊から幼年へ、幼年から少年に育つて行きました。



二 大工となつたイエス様

ヨセフ一家の貧乏——十二歳の時イエス様大工となる——労働は正しい神の掟——富める者をいませめたイエス様の言葉

大工となつたイエス様

月日は水の流れるやうに早く過ぎ去りました。この月日のながれは人の考へも氣づかない間に、いつか遠くの方へ持つて行くものです。

ヨセフとマリアはその後大勢の子供を生みましたので、貧乏がだん／＼ひどくなつてゆきました。ヨセフがいくら働いても満足に食べることも着ることも出来ませんでした。

ヨセフはこの頃は烈しい労働の疲れと、貧しさのため、神様に祈ることさへ忘れ勝でした、一週間に一度、日曜日には皆と一所にお寺におまわりはするものの、牧師さんの御説教をきいてゐる内に、疲れが出て来てコクリコクリと居眠を初めるのでした、こんな風でしたから、いつか長男のイエスが、神様から遣はされた救主であるといふ事などはすつかり忘れてゐました。

マリアもヨセフにおとらない澤山の苦しみを持つ方でした、毎日のやうに大勢のものの御飯の仕度をしなければならぬばかりか、子供の着物を縫つたり洗濯したりしなければなりませんでした。

子供が喧嘩をする、泣く、わめく、あばれる、マリアはその度毎に子供をすかしたり、なだめたりお菓子をくれたりしなければなりませんでした。まるで眼のまわるやうないそがしさです、だから子供が眠つてしまふと氣が遠くなる程疲れてしまふのでした。

けれ共、マリアは神様にお祈りすることを忘れませんでした。そしてその度毎にかう神様にたづねるのでした。

「神様、イエスは神様のおさづけ下すつた、救主でございませうか、あはれな母親はそれを信じてよろしうございますか、それから神様、私達の肩から

貧乏の重荷を少しとりのぞいて下さいませんか、私もヨセフももうもう倒れて死にさうでございます……」

「それ共、その甲斐は少しもありませんでした。貧しさはヨセフの家にすつかり腰をおちつけてしまひました。」

十二歳の時、イエスは大工となりました、そして父と一所に額に汗をながして木をけづつたり、板をけづつたりしました。

マリアはよごれた労働服を身につけてせつせと働いてゐるイエスの姿を見る度に、恐しいやうな氣がしました。神様がおつかはしになつた大事な人に、こんな労働をさせていゝのかしらと思ひました。

「お前、大工の仕事をつらいと思ひませんか。」と、ある日のこと、イエスにたづねました。すると、イエスはびつくりしたやうに顔をあげて、

「お母さん、どうしてそんなことをきくんですか。」と、言ひました。

「なにね、お前がまだ子供だからつらいだらうと思つてね。」

「そんなことありませんよ、みんな神様のお思召ですから。」

「お前はさう思つてゐるのかね。」

「誰だつてさう思ふのはあたりまへですよお母さん、働くことは神様のお心にかなふことですよ。」

「それで私は安心しましたよ。」

かう言つて母親はほつと深いためいきをもらしました。

イエスは決して自分の仕事をいやしいとは思ひませんでした。木をけづつたり、板をけづつたりして家をたてるといふことは、非常に尊い仕事だと思つてゐました。何故なら、それは人のためにつくす仕事であつたから、――

イエスの考へでは、人は誰でも人のために働かなければならないものだと思
じてゐました、麥をつくる人、羊を飼ふ人、家をたてる人、車をひく人、及
物をつくる人、衣服を織る人皆それ／＼立派な労働でした、若し人がこの勞
働をいやしんでしなかつたらどうなるのでせう、澤山の人が御飯を食べるこ
とも出来ないし、着物を着ることも出来ません、そして、人間の生活はその
次の日から續けて行くことが出来なくなるのです。

ある日のことでした、イエスがシャツ一枚で木をけづつてゐるところに、
ある物持の息子がやつて來ました、彼は一寸頭のいゝ青年でしたが、正直な
心を少ししか持つてゐませんでした。

「今日は、イエス君……」と彼は言ひました。

「今日は、」とイエスは尙板をけづりながら答へました。

「君はすつかり變つたね。」

「僕が、何うして……」

「君はつい四五日前まで毎日神様のことばかり話してゐたぢやないか。」

「僕は今だつて神様のことを話してゐるよ。」

と、イエスは一寸手をやすめて答へました。

「僕にはさう思へないね、君の様子を見ても、君の顔を見ても、君の傍に神
様があるとは思へないよ。」

「何うして……」

「君はかう言ふ話を知らないんだね。」と、金持の息子が言ひました「ある國
に一人の美しい姫君がをつたのさ、姫君だから、住んでゐる御殿も立派だつ
たし、着てゐるお召物だつて美しくかつたし、それに心がやさしくて、大變惻

巧な方で、神様のことは一日も忘れたことがなかつたのだよ。だから神様もその姫君を大變可愛がつてゐたのさ。」

「それが、何うしたと言ふんだね。」と、イエスは又仕事を初めながらたづねました。

「ところが、ある時、隣國のために、國を奪れて、王様も女王様も殺されて、美しい姫君はたつた一人で遠くの國へ逃げて行かなければならなかつたのだよ、さあ、さうなると、姫君には唯一人力になる人がゐないだらう、住む家はなし、食べるものはなし、仕方なしに身につけてゐた立派な着物や、寶石類を賣つてその日くを泣きくらしてゐたのさ、ところが、その金もいつの間になくなつてしまつたので、しまひには牧場に使れて、羊の乳を搾らねばならなかつたのだよ、着物はきたないし、食べるものが悪いし、おまけに

身體はいやな臭ひがするといふ譯だからたまらないさ、そこで永年傍にゐた神様もあいつがつきてとうく逃げて行つてしまつたのだよ。」

「そんな馬鹿なことがあるものか。」と、イエスは少し顔を眞赤にしてどなりました。

「何うしてさ、君はさういふ事を信じられないのかね、神様の住んでゐらつしやる天國は美しいんだよ、だから神様だつて労働者よりきれいな金持の方が好きさ。」

「それは神様でなくて悪魔だ。」とイエスは言ひました。「その姫様の傍にをつたのは、神様の眞似をした悪魔なのだ、君は羊飼になつた姫様をあざけてゐるが、姫様は羊飼になつて初めて神様を知ることが出来たといふものだ、働くことを知らないで毎日怠けてゐる、金持の人などは、皆神様のお心にそ

むいてゐるのだ、神様は働く人のそばにいらつしやるのだ、我々が汗をながしてゐる時、神様は傍にいらつしやるのだ、君達のやうに、ぜいたくな着物を着たり、頭に香水をつけたりする人の傍にはゐないのだ、君はあの輝いてゐる太陽の光を真直に見ることが出来るか、出来ないだらう、太陽の光を真直に見ることが出来るものは働く人ばかりだ。」

かう、きびしく言はれたので、金持の息子は真赤になつて逃げて行つてしまひました。

「金持の人間が天國へ行くことは、駱駝が針の穴をとほるより難かしい。」

これは、イエスが仰つた名高い言葉であります、イエスは十二歳の時からそのことを感じてゐたのでした。そして労働しない人間をにくんでをられたのでした。

三野の修行

野に叫ぶ人あり——ヨハネとイエス様の會見
——悪者のいたづら——人はパンのみにて生きるものにあらず

イエス様が世の中にあらはれて、教へをとかれた少し前のことでした。

エダヤの野原に不思議な人があらはれました。彼の髪は海草のやうに長くのび、汚ない顔には髯がぼうくと



生えて、その中から鋭く光る眼が、らん／＼と輝いてゐました。

彼は駱駝の毛衣を着てゐました、そして蝗と野蜜を食べて、その外のものは一つも口へ入れませんでした。

彼の名はヨハネと言ひました、彼はザカリアの子でしたがある夜不思議な神様のお告げを夢に見たのでした。

「お前は直ぐにユダヤの野へ行かなければなりません、そして人々に向つて、間もなくこの世にお出でになる救主のことを話さなければなりません、お前の一生はそのために輝くでせう。」

そこでヨハネは直ぐにユダヤの野原にやつてきて神様のお告げを人々に傳へたのでした。

「天國は近づいたのだ。今こそ我々は自分の罪を悔いあらためなければならぬ、救主は今我々の近くにあらはれやうとしてゐる、自分の罪をかくさうとする者は、終に天國に行くことは出来ないだらう。」

ヨハネの火の様に燃えた信仰の聲は、野から野へ人の胸から胸へ鐘のやうに響き渡りました。その聲は神の聲のやうに思はれました、人々はその聲にふれると自分達の偽りの多い生活を考へずにならなれませんでした、そしてヨハネの前に脆いて、自分の罪深い生活を悔改めて、新しい生活に入ることを誓ひました。

ヨハネの熱烈な傳道の聲は、ナザレのイエスの許にもつたはつて來ました。それでイエス様も人々も一所にヨハネからバプテスマ（洗禮のこと）をうけるためにユダヤの野にやつてきました。

野に着いた時、夕陽が眞赤に輝いて、野の果に落ちやうとしてゐました、

そして數百の人々が、ヨハネを中央に圍んで、その熱烈な神の教にきゝほれてゐました。

すゝりなきの聲が所々から聞えてきました。ある人はよろこびの餘り、叫び聲をあげて神様を讃えました。ある人は自分の罪の恐しさに氣づいて、氣を失つてしまひました。

傳道は終りました。人々はうなだれて、ヨルダンの河に近づきました、そして河の流れにはいつて悔改のバプテスマを行ひました。

『何卒私にもバプテスマをうけさせて下さい。』と、イエスはヨハネに近づいてかう言はれました。その時、不思議なふるひがヨハネの身體に起りました。彼はおどろいて二三歩うしろに下りました。そして一二分間イエス様の顔を睨つと眺めてゐた彼は、突然ひざまづいて叫びました。

『あなたは神様が私にお告げになつた救主です、私はあなたの靴の紐を結ぶにも値しないものです、何卒私をあなたのお弟子にして下さい。』

人々はおどろきました。それにもましてイエスと一所に來たナザレの人々がおどろきました。そしてぼんやりと、たゞイエス様の顔を見あげるばかりでした。

『何卒立つて下さい。』と、イエス様はヨハネを眺めて言はれました、その聲はおどろきのために少しふるえてゐました。『私はあなたの言葉を信じていゝのか悪いのか判りません、けれ共、私もやはり罪を持つた人間です、何卒あなたの手で私にバプテスマをうけさせて下さい、私は新らしく生れかはります、そして自分も傳道の旅をつゞけませう。』

『ではお許し下さい。』とヨハネは言ひました。

『私は神様のお心に従つてあなたの望みをかなへませう。』そしてイエスはヨハネの手でバプテスマの式を行ひました。

これはイエス様の三十歳の時でした。

人を救ふには先づ自分を苦しめ、鍛へあげなければならぬとイエス様は思ひました。悪魔のふところに飛び込んで行つて、自分をためさなければならぬと思ひました、そして人間の悲しみ、人間の慾、人間の弱さを知らなければならぬと思ひました、それでイエス様は寂しい野原にお出になつて、四十日の間、日夜、何も食べずに苦しい生活をしました。

雨ははげしく降り、風は恐しく吹きすさみ、きびしい寒氣がイエス様の方をおそひました。けれ共イエス様は眼をとちられて、只神様の名を呼んでをられました。

ある風の冷たい夜のことでした、近所の悪い奴が、イエス様をこまらしてやらうと思つて、悪魔のやうな形をしてやつてきました。彼は懐に暖かいパンやブン／＼甘い匂のする羊の焼肉を持つて來ました。

『おい／＼大工の子イエス。』と、悪者は言ひました。

『お前は誰だ。』

『俺は森の中に住んでゐる悪魔だ。』

『悪魔だ、この世の中にそんな者が住んでゐるものか、お前は悪い心を持つた人間だらう。』

『馬鹿を言へ、俺は森の中に住んでゐる三人の悪魔の一番兄だ。』

『お前は私に何の用事があるのだ。』

『私はお前にいゝものを持つて來たのだ。お前は四十日間何も食べないな、』

それでお腹がすかないのか。」

「お腹はちつとも空いてゐない。」

「すいてゐない、お前は嘘を言つてゐるな。」

「私は嘘は言はない。」

「それちやお前は神の子か。」

「私は神の子ではない、私はたゞの人間だ。」

「たゞの人間が何うしてパンなしで生きてゐられるものか。」

「私は人間の苦しみを自分で味はうとしてゐるのだ。」

「ごまかすな、お前は本當におなかが空いてゐないか。」

「空いてゐない。」

「本當にか、お前はこんなにおいしいものを見ても食べたいと思はないか。」

かう言つて悪者は懐に持つてきたパンや焼肉をその前に持ち出しました。イエス様はそのパンと焼肉を睨つと眺めてゐましたが、やがてためいきと一所に堅く眼をつぶつてしまひました。

「どうだ、イエスこんなにおいしいものを見てもお前は食べたいと思はないか。」

だがイエス様は無言でをられました。

「これでもか。」と、今度はそのブン／＼匂ふ焼肉を鼻の先につきつけて悪者が言ひました。

と、突然、

「悪魔よ、去れ。」と、イエス様は鋭い聲で叫ばれました、「人はパンのみで生きるものでない。」

野は眞暗でした、空には星さへ見えませんでした、冷たい風が走つてゐました、イエス様は悪者が去つたあとで無言で考へてをられました。非常に寂しい氣がしました。

『人はパンのみで生きるものではない。』と言つた言葉の裏には『人はパンがなければ生きることが出来ない。』といふ意味があつたのでした。イエス様はこの二ツのことを考へてゐたのでした。

さつき、悪者がパンと焼肉を鼻につきつけた時、イエスは、自分のひもじさを泌々と感じました、けれ共イエス様はそれを食べはしませんでした。

イエス様が四十日間も何も食べなかつたのは深い譯があつてのことでした。それは人間の苦しみを知りたかつたためです、人間にパンのない程苦しいものはないと言ふことを知りたかつたからです、人間はパンがなければ、

どんな悪い事でもする弱さを持つてゐることを知りたかつたためです。そしてイエス様は、さつき悪者にパンと焼肉をつきつけられた時、一層、パンのない苦しみを知られたのでした。

では何故、イエス様は悪者のパンを食べなかつたのでせう、それにも深い理由があります。若しイエス様がパンをお食べになつたら、悪者は、人間はパンだけで結構生きて行かれるものだと思つて、神様のありがたさを忘れ、益、罪をふかくするからです、イエス様は、人間の心には常に悪いさま／＼な心があつて、他人を苦しめたり、にくんだり、そしつたり、争つたり、殺し合つたりすることを知つてをられたのでした、だから、イエス様は悪者に向つて、

『人はパンのみで生きるものではない。』と、仰せられたのでした。

その後、悪者達はイエス様の所にやつてきて、寶物を見せびらかしては、誘惑するのでした。

「おい、神の子のイエス、この立派な寶石をほしいと思はないか、この寶石一つあればお前は大工をやめても一生樂に暮して行くことが出来る、何うだ、僕等の仲間にならないか、そしたら、この寶石を三つお前にあげようぢやないか。」

けれ共、イエス様は最早彼等の誘惑の言葉に耳を傾けませんでした、そしてひたすら、自分を鍛へあげることに心を苦しめました。



四 豫言者とその故郷

ユダヤ人の宰とイエス様の會話——水をくむサマリヤの女——故郷
を追出されたイエス様

イエス様は傳道の根據地をガリラヤの湖水の西北の岸にあるカペナウンといふ町におきました。こゝは商業の盛んなところで税關もあれば兵營もありました。この町にイエス様はお母さんや、兄弟や、弟子達と一所に住んで、神の教へを熱心にといてゐました。

間もなく、ユダヤ人にとつては大切な逾越節といふお祭が近いてきました、それで全國から多くの人が首都のエルサレムに上りはじめたので、イエス様も都に上つて傳道をはじめることになりました。

ある日のこと、エルサレムのイエス様の宿に、ユダヤ人の宰をしてゐるニコデモといふ人がたづねてきました。

ニコデモは調子のよいお世辭で、イエス様の人格の高いことをほめました、そしてあなたはきつとたいの人間ではない、神様のお子にちがひないと言は

れました。

イエス様はかういふ他人のお世辭をきく度に不快な氣持をいだかれまして、そしていつもさういふ時になさるやうに眼をつむつてゐたが、間もなく、『私は神の子ではない、たいの大工の子です。』と申されました。

『いや、とんでもないことでせう、あなたがそんなに謙遜なされても、誰も信じませぬ、あなたは野で悪魔を追歸しなされたでせう、それから、カナの結婚式では水を葡萄酒になされたでせう、その他あなたのなされた不思議な奇蹟は知らない者はありません、あなたはきつと神様のお子です。』

イエス様はますます不快な氣持がしました、ニコデモがこんなにお世辭を言ふ心の内が、イエス様には、鏡を見るやうにはつきりうつつて見えるのです、彼はイエス様の奇蹟を口ではほめてゐるが、心の内では、大工の子など

にそんなことが出来るものか、と思つてゐるのです。

「私は神の子ではありません。」と、イエス様は再び言ひました、「けれ共、私は新らしく生れかはつたのです、人はすべて一度罪を悔いて生れ變らなければ、天國に行くことが出来ません。」

「けれ共イエス様、その教へは私達には無理と言ふものです、私はこの通りいゝ年をしてゐます、今更、母親の胎に入つて生れ變るなどは及びもつかないことです。」と、ニコデモはイエス様を一本やり込めたやうな氣持で言ひました。イエス様はこれをきいて、彼の心のまづしいことを泌々となげかれました、そして言ひました。

「人は肉體で生れかはるものではない、水と靈で生れかはらなければ、神様の國には行かれないものです、新らしく生れかはるといふことは、罪を悔い

て神の教へに従ふことです、その時、私達は初めて誠の生活が出来たのです。」

こんなことがあつてから、イエス様は富める者や、宰や、心のおごつてゐる人達をだんだん厭ふやうになりました、これ等の人々は、物質に眼がくらんで、魂のことをすつかり忘れてゐるのでした、そして深い罪を犯してゐながら、自分では立派なことをしてゐる様に思つてゐるのです。

イエス様は貧しい人や、苦しんでゐる人や、悲しんでゐる人や、病んでゐる人達を、なつかしく、親しく思はれました。彼は嘘と虚榮と、慾に充ちてゐる都の生活が何となくいやに思ふやうになりました。それで、七八ヶ月の後、エルサレムを去つてガリラヤに歸られました。

その途中、サマリアにかゝつた時でした、弟子達が町へ晝飯のパンを買ひに行つたあとで、イエス様は井戸傍で休んでゐました。そこへ一人の婦人が

水をくみに來ました。

『何卒私にも一杯水を飲まして下さい。』とイエス様は婦人に向つて申しました。

『きれいなよい水ですね。』それを飲みながら、『あなたは神様を信じてをられますか。』と、婦人にたづねました。

『いゝえ』と、婦人は答へました『私は大變不幸な女でございます。』
そして彼女は自分がこれまで五人の夫に別れたことや、商賣のうまくいかなかったこと、などを語つて、

『私は不幸のために神様のことを考へる暇がなかつたのです。』と、言ひました。

イエス様は暫くの間、無言でをられました、それから『大變不幸なお身の

上ですね。』と、申されました。『神様はあなたの不幸をお知りなされたら、きつと慈悲を與へて下さるでせう。』

それからイエス様は表面の幸不幸のまぬがれがたいこと、それは丁度渴のやうなもので、水を飲んだときは、やれうれしいと、喜びを感じるが、暫くすると、又渴を覺える、飲んだかと思ふと、すぐ又渴く、そんな具合で世の中の幸不幸といふものは、水の泡のやうなものである――。

『けれ共、神様を信する人は心の満足をいつでも得られます、神様は不幸な人に心の幸を與へられます、神様をお信じなさい、神様はあなたと一所に泣き、あなたと一所にはゝゑみます、そしてどんな寂しい時でも、あなたの心に住んでをられます、暗い闇を行つても、寂しい野を行つても、神様のお名を呼びなさい、神様は、光となり、小鳥の聲となつて、あなたの道伴をなさ

るでせう。』

熱心なイエス様の教へに彼女は、まるで悪夢からさめたやうな心地がいたしました。

『まあ、あなたの教へをきいてゐると、罪によれてゐる私の魂が、蘇生するやうな氣持がいたします、あなたはきつと、神様がおつかはしになつた救主でございませう。』

かう言つて、婦人は水をくむことも忘れて、自分の村にかけて行きました、そして今度は大勢の村人と一所にやつてきて、イエス様を自分の村に案内いたしました。

イエス様はこゝで、すなほな村の人達に向つて、二日間、ありがたい神の御慈悲をおとさになりました。

イエス様は久振で熱のある、傳道の出來たことをうれしく思ひました、何事も心配なくたゞ神様のことはかり話すことが出來たのを此上なく喜びました。

それに反してエルサレムやユダヤの七八ヶ月の傳道を思ふと、イエス様の心は暗いものにおほはれました。

都の人達はなまじつか學問をしてゐるので、イエス様が熱心に誠の教へを説いても、いつでも疑ひの眼できいてゐるのでした。その眼を見る度に、イエス様は傳道に苦痛を覺えました、こんなに、正しい、ありがたい神の教へを説いてゐるのにこの人達には何も判らないのかと、思ひました、かう思ふと、イエス様は傳道をやめて、山の中にかくれてしまひたいやうな氣がするのです。

ところが、サマリアの村人にはそんな疑ひの眼を一つも見つけることが出来ませんでした、人々はたゞ正直に、熱心に、イエス様の教へをきいてゐるのでした、何といふ尊い心でせう、他人を疑ふこと程いやしいことはありません、若し他人にだまされても、他人を疑はなかつた人は、神様の恵みを多くうけることが出来る人です。

サマリア人の純朴な心に接したイエス様は、ふと、なつかしい自分の生れ故郷である、ナザレの村を思出しました。彼は急にふるさとに歸つて、なつかしい故郷の景色や、幼な友達に會つて話して見たいと思ひました、それで同伴の人や、弟子達を一先づ家に返して、一人でナザレの村に參りました。その日は日曜日でした、日は美しく輝き、お寺では祝福の鐘がなりひびいてゐました、村の人達はさつぱりした着物を着て、ぞろ／＼そろつてお寺に

行くのでした。その有様を見た時、イエス様は、十位の少年に歸つたやうな氣がいたしました。

イエス様は村人と一所にまじつてお寺にはいつて行きました。そして自分もあたりまへの參詣人となつて、一つの堅い木の椅子に腰を下ろしました。けれ共、かうした謙遜なしづかな心持が、やがて、牧師のおどろきの聲で破られました。

『おゝ、あなたは神様がおつかはしになつた救主です、イエス様です、どうぞ、こちらにいらして下さい、そこにゐらしてはあまりに勿體なく存じます、どうぞこちらにお出で下さつて、ありがたい神様の教へを、村の人達にきかして下さい。』

かう言つて牧師はイエス様の手をとつて、祭壇につれて行くのでした。

この時も、イエスはしみじみとさみしく思ひました。

『この牧師は私の心を少しも知つてくれない、そして神様の心も本當に知つてゐない、私が何故村の人達と一所に堅い椅子にすはつてゐるのが勿體ないのだらう、人は神様の教へを深く信すれば信する程、たかぶつてはならない、村人と友達となり村人と一所にすはつて、一所に神様のことを語るところに、牧師のつとめがあるのではないか。あゝ、私は自分の名が人々の口に讃えられるのが、一番苦しい。私はいつまでも、神の下僕でありたい、いつまでも大工の子イエスで満足である。』

村の人達は、牧師の言葉でびつくりいたしました、そしてイエス様の顔を一せいに眺めました、その時一人の男が叫びました。

『あれはヨセフの子のイエスではないか、大工の子が何んで救主なものか。』

『さうだヨセフの子は大工の子は大工の子に何で神様の教が判るものか。』かう言つて、人々はわい／＼騒ぎ初めました。神聖な寺の内は、罵りや、わめく聲に充たされてしまひました。その中、氣の早い三四人の者が飛出して來て叫びました。

『あんなにせ者をつまみ出してしまへ、神聖な寺をけがすも同じだ。』

イエスは何も申しませんでした。そして、人々に引立てられて村のはづれ迄來ました、間もなく彼は一人になりました。彼の眼には一杯涙がたまつてゐました、彼は決して村人を憎まうと思ひませんでした。又牧師の愚かな仕打をも憎まうと思ひませんでした。たゞ、かなしげに、

『豫言者はその故郷に尊まれるものではない。』と言つて、ナザレの村を去られました。

五 皇帝のものは皇帝に歸し

神様のものは神様に返せ

怠者と高慢な學者と無慈悲な繼母——惡人達のたくらみ——罪深い女——罪なき者その女に石を打つべし——皇帝のものと神様のもの

それから後、イエス様は弟子達と一所に方々へ行つて神の教へをおとさになりました。

澤山の弟子がふえました。イエス様の名を讃える聲は寺でなる朝の鐘のやうに人々の耳につたはりました。すると、なかにはイエス様を憎む人間があ

つていろく／＼な惡口を言ふのでした。

怠け者が来てイエス様にたづねました。

「神様は何處にゐるのですか。」

「神様は汗をながして働く人の傍にゐるのです。」とイエス様は答へました。高慢な學者が来てたづねました。

「神様は何處にゐるのです。」

「神様は謙遜な人の心に住んでゐるのです。」

無慈悲な繼母がやつてきてたづねました。

「イエス様、私は大變不幸でございます、私には明日買ふパンのお金がありません、何うすれば神様はお金を私にくださるでせうか。」

「家に歸つて先妻の娘を可愛がつてやりなさい、すると神様はあなたに幸福

皇帝のものは皇帝に歸し神様のものは神様に返せ

をさづけて下さるでせう。』

夜遊びをして晝は家にはかり閉ちこもつてゐる、金持の息子がやつてきてたづねました。

「イエス様、何卒あなたのお力で私の眼をなほして下さい、私の眼はお醫者にも見はなされたのです。」

「朝早く起きて野へ行きなさい、神様はそこであなたを待つてゐるでせう。」

イエスはガリラヤの湖岸で傳道を初めました、その時、漁夫のペテロや、アンデレ兄弟や、ヤゴブとヨハネの兄弟などが、イエス様の弟子となりました、そしてその後十二人の弟子がイエス様と苦しみや喜びを共にして、次から次へと傳道して歩きました。

ユダヤの三つの大祭の一つである、構盧節があつた時でした。イエス

様はひそかにエルサレムの都に行つて、神殿で説教を初めました。

賑かなお祭から歸つてきた人々は、神殿からひゞいてくる、ほがらかな、

尊いイエス様の教説にきゝほれて、何れも神殿の中にはいつて行くのでした。

熱のある、おごそかな、ありがたい神の教へは、一句くつよく人々の胸にひゞきました。ある女はイエス様の教へをきいてゐる中に、死んだ子供を思ひ浮べました。ある男は兄弟と喧嘩したことを思浮べて、今更悪いことをしたと思ひました。ある娘は父親に不孝をしたことを考へて苦しみをうけました。又、ある貧しい寡婦さんは、初めて自分にも幸のあることを知りました。

神様におすがりなさい、いゝ事をしようと思ひなさい、病人を見たら薬をあたへてやりなさい、罪深い人を見たら、なさをかけてやりなさい、そ

して汗をながして働きなさい、その時、神様はあなた達のお傍についてゐら
つしやいます、自分の罪を神様の前にかくしてはいけません、神様は決して
皆様をおせめにはなりません、自分の罪を後悔した時、天國の門は皆さんの
爲に開かれるのです。』

人々は、イエスの尊い言葉に感じて、我も我もと弟子になることを誓ひま
した、そして神様のお力をほめたゝえしました。

けれ共、中にはかうしたありがたい有様を見て非常に反感を持つ人達もあ
りました、學者や軍人達がさうでした。

この人達はイエス様の教へは國を危くするものだと思ひました。ローマの
王様をあなたよりモーゼの法律をふみにじるものだと考へました。けれ共、イ
エス様はモーゼの法律やローマ王の悪口は一言も言はなかつたので、彼等は

何うしてもイエス様をせめることが出来ませんでした。

そこで何うかしてイエス様を苦しめて、罪人として牢屋へ叩き込んでしま
ひたいものだと考へました、そこである日いろく相談した結果、彼等はよ
くないことをたくらんだのでした。

イエス様がいつものやうに神殿で神の教へをといてゐる時、急に外が騒し
くなりしました、そして人々は口々に、

『不義者を石でうつて、不義者をたゞき殺せ。』と、叫んでゐました。

その多くはパリサイ宗のともがらや、悪い學者や、軍人達でした、そして
人々の真中に、顔の美しい、一人の女が、彼等に唾をひつかけられたり、罵
しられたりして、さめくと泣いてゐるのでした。

彼女は非常に不幸な女でした、彼女ははじめやさしい母親と二人で田舎に

住んでゐたのでした、けれ共、彼女の心には虚榮といふ悪い蟲が住んでゐて、田舎の生活をきらつて都に出たい、都に出たいと考へてばかりゐました。

そしてこの美しい娘はある日一人の母親を見棄てて、エルサレムに逃げて來ました。それから後の娘の生活はそれはくひどいものでした。壁屋が壁を塗るやうに自分の身體に罪を塗りつけたのでした、そして、この日彼女は悪いことをしてゐる所を、軍人につかまつたのでした。

モーゼの法律では、不義者は、石をうちつけて殺すことになつてゐました、けれ共、ローマ王の許可を得なければ、死刑は出來なかつたので、この期會を利用してイエス様をわなに陥入れて、牢屋にたゝき込んでやらうと思つたのでした。若しイエス様が、この女を死刑にしろと言へば、それはローマ大守の許可を得ないですることであるから、非常な罪を犯すことになる、これ

と反對に、若し女を許せと言ふと、モーゼの法律を守らないことになるから、イエス様の教は邪教である。だから國を危くするものであるといふ理由で、彼を牢屋に縛りつけることが出来る。どつちにしろ、イエス様を牢屋にたゝきつけることが出来るのでした。

パリサイ宗のともがらや、悪い學者や軍人達は、非常な意氣込みでイエス様が説教をしてゐる神殿にやつて來ました、そして女の裁きをイエス様に問ふたのでした。

イエス様、この女は姦淫をしてゐる時、現場で捕へられたのです、モーゼの法律では石でうち殺すことになつてゐますが、あなたの教へでは、この罪深い女を何うなさいます。』

イエス様は無言で、彼等の言ふ訴へをきいてゐました、そして彼等は何の

爲にこんなことをするのか、すぐ見ぬいてしまひました。

彼女は尙も悲しさうに泣きつゞけてゐました、そしてイエス様が近づいた時、彼女は涙にぬれた眼をあげて、イエスの顔を見あげました。その眼はかうさゝやいてゐるのでした。

『尊いイエス様、何卒罪深い私を救ふて下さいませ。』

イエス様は彼女の不幸な心をよくさとることが出来ました、そしてこの不幸な女は今自分の罪を悔いてゐるのだとお思ひになりました。イエス様は急にかゝんで、地に字を書き初めました、彼は暫の間無言で何事も答へませんでした。

『イエス様、あなたは何を愚圖くしてゐられるのです、あなたの教へはこの罪深い女を何うお裁きになります、殺すのですか、それ共許してやるので

すか。』

彼等はイエス様が無言でゐるのを見て、勢込んでたづねました、そして心の中では今何とか言つて見ろ、そしたら、引捕へて牢屋に叩き込んでやると、力んでゐました。

やがてイエス様は顔をあげられました、そして自分の答へを持つてゐる人をきつと睨むやうに眺めました。その眼の光は悪いたくらみを持つてゐる彼等の心を射すくめるやうに思はれました。

『お前達の中』と、イエス様は低いが、強い怒りの言葉で申されました、『お前達の中、罪のない者が、先づこの女を石でうつがいでらう。』

そしてイエス様は女の顔を睨つと眺めて、次に再びうつむいて地に字を書いてをられました。

この短かい言葉は見事に悪人達の心臓をつらぬきました。彼等は内心ハツと、おどろきました、そして自分を考へた時、彼等は何うしていゝかわかりませんでした。彼等は女を見棄てて、一人去り、二人去り、すべて消えうせてしまいました。

この不思議な有様をあつげにとられて眺めてゐた女は、まるで夢を見てゐるやうな気がしました。

「あなたを訴へに來た人達は何處へ往きましたか、もうあなたの罪をさだめる人はゐませんか。」

と、イエス様はやさしい言葉で問はれました。

「イエス様、誰もをりませぬ。」

「私もあなたの罪をさばくことが出來ません。お歸りなさい、そして二度と

罪をかさない様に神様を信仰しなさい。」

彼女は、初めて悪い夢からさめたやうな喜びを胸一つばいに感じました、そして静かに地に字を書いてゐるイエスを見た時、彼女はまるで神様を仰ぐやうな不思議な光にうたれました。

「お、神様。」と彼女は突然脆いて叫びました。

「私の罪をお許し下さい。私は恐しい罪人でございます、何卒、私を救ふて下さいませ。」

そして彼女は地に身をなげて泣き伏しました。

イエス様は近づいて彼女を抱き起されました。そしてやさしい言葉で申されしました。

「あなたはもう立派に救はれました、たゞく神様にお祈りすることを忘れ

ないやうになさい。」

この不幸な女はやがて自分の罪を悔いて、非常に立派な、氣高い心を持つた婦人に歸られました。そしてイエス様が十字架にかゝつて死ぬまで、眞心こめてイエス様につかへたのでした。

イエス様は、このやうに罪深い女でも、決して責めやうとなさいませんでした。イエス様は神を恐れぬ學者や、軍人や、金持や、位のある人達を、非常に叱つたり、罵しつたりしましたが、このやうに罪深い人に對しては決して叱らうとなさいませんでした。

人間は誰でも、罪を持つてゐるのです。だから、私達はどんな場合でも人の罪をさばいたり、叱つたりすることは出来ません。イエス様のやうな立派な人格の人でさへ、罪人をさげすんだり、叱つたり、罵しつたりしなかつた

のです。私達は皆やさしい心で人の罪を許してやらなければいけません、それは神様のお心に一番かなつた人間の務なのです。

イエス様に見事にやりこめられた、悪い學者や、軍人や、パリサイ宗のやからは、益、イエスを憎むやうになりました、そして何うかしてイエス様をやり込めて牢屋にたゝき込んでやりたいと、又も悪い考へを起しました。そしてパリサイ宗のやからは、平常自分達と犬と猿のやうに仲の悪い、ヘロデ王の家來まで仲間に入れて、イエス様を苦しめやうとはかりました。

ある日のこと、彼等是一个の計畫を相談してイエスの許に參りました。

「イエス様、尊いあなたの教をうけたく參りました。」と彼等は如何にもイエス様を尊敬してゐるやうに申しました「一體、今日ローマの屬國である私達ユダヤ人は、皇帝カイザル、オーグストに税金を納めるのが本當でせうか、

皇帝のものは皇帝に歸し神様のものは神様に返せ



納めないのが本當でせうか。』

イエス様はこの問を無言で考へてをられました、そして彼等が、又悪い考へを持つて自分を苦しめるためにやつてきたのだと、すぐおさとりになりました。

若し程金をカイザルに納めなくていゝと言ふと、彼等はローマの謀叛人として訴へるに違ひない、そこで、税金を納めなさい、と言ふと、今度はユダヤ國を賣る賣國奴であると罵しつて、ユダヤ人をおだてて、排斥するに違ひない。かういふ悪い計畫のあることをイエス様はすぐ見ぬきました。

「偽善者よ、お前達は又私を試みるのか。」と、イエス様は鋭い聲で、彼等を叱りつけました。

「お前達は私にそのことをたづねる前に、皇帝に納める金を持つてきたか。」

皇帝のものは皇帝に歸し神様のものは神様に返せ

そこで彼等は何心なくデナリといふ三十錢ばかりの銀貨を一枚出してイエス様の手に渡しました、イエス様はそれをとると、銀貨の上に鑄てある肖像を示して、

「これは誰の肖像か。」と質ねました。

「カイザルの肖像であります。」と彼等は答へました。

「カイザルのものは、カイザルに返せ、神のものは神に返せ。」

イエス様は恚う叱つて、悪人達をきつと睨みつけられました。すると、彼等は一言もなく、逃げるやうにして立歸つてしまひました。

「カイザルのものはカイザルに返せ、神のものは神に返せ。」

このイエス様の仰せられた言葉は、實に意味の深い教へであります。

イエス様の眼から見ると、そのやうな金は何のやくにもたゝなかつたので

す、イエス様の信ずるのはたゞ神だけであつて、他人の國まで奪ふローマの王様などは少しもありがたと思つてゐなかつたのです。

「お前達はカイザルの金のために、人間の一番大事な自由といふものを賣つてゐる、人間の自由は神様が與へて下さつたのである、お前達はその金をカイザルに返して、カイザルに賣りつけた自由を取返すがよい、そして神様へその尊い自由を返すがよい……。」

まことに、イエス様は人間の自由といふことを大變に重んじてをられたのでした、このイエスの言葉は、味はへば味ふ程、私達にとつて、ありがたい、尊い教へをふくんでゐるのでございます。



六 放蕩息子の話

田舎をきらつて都へ飛出した次男——都の悪い生活——後悔して故郷に歸る——父親の歡びと祝宴——神様と子供の生活

罪を悔ふことと、罪ある人を許し合はなければならぬといふことは、イエス様が繰返しく弟子や信者に説かれた教であります。神様の教を信ずる人の中には、自分のことを忘れて人の罪をさがしては、せめる傾があるのです、けれ共、イエスは決して人の罪をせめませんでした。彼は罪を責めるかはりに、その人をあはれみました、そして神様を信じなければならぬことをお説きになりました。

イエス様はこの教へをいろくな判り易いお話で信者達にとかれしました、今名高い放蕩息子の話を皆様にお知らせしませう。

あるところに大變金持の百姓がありました。父親と長男と次男と三人の家族でしたが、田畑を澤山持つてゐたので、下男や下女を大勢使つてゐました。父親は大變親切なやさしい人でした、下男や下女をまるで自分の家族のや

うにいたはつてやるので、村の人達は神様のやうに崇めておりました。貧乏人や病人を見ると、金をあたへたり、食物を送つたり、お醫者を連れて行つたりするので、この村では不幸な人はありませんでした。

二人の息子の中、長男は元氣で毎日田へ行つては下男達と一所になつて働いておりましたが、次男の方は怠け者で、田舎をきらつて都に出たいと口ぐせのやうに言つておりました。そして二十頃になると父親にせがんで早く財産をゆづつてほしいと、無理な願ひをするのでした。

人のよい父親は再三再四せがまれるので、仕方なく、財産の半分を次男に分けてやりました、すると、彼は大喜びで寂しい田舎を見棄てて、賑かな都へと参りました。

都に来て見ると、まるで世の中が急に明るくなり、美しくなつたやうに彼

は思ひました。そして立派な旅館に陣どり、贅澤な洋服や、帽子や、靴で身を飾つて、毎日芝居見物や、音楽會や、悪い場所に入出して、父親が汗でためた金を湯水のやうに使ひました。

うかくくと、日を暮らしてゐる中、所持金はだんく減つて行くばかりでした、漸く氣がついて、これではいけないと思つた時は、金は一文もなくなり、悪い病氣にかゝるといつた有様で、とうく旅館からも追出されてしまひました。

何うすることも出来ず、遊仲間に行つて金を借りようと思ひましたが、かういふ友達には金がある中は親切をつくすが、金がないと唾もひつかけない悪い人ばかりです。何處へ行つても玄關拂ひを食ふやうな、哀れな有様でした。丁度、その時、この地方はひどい飢饉におそはれました。それで一人前の

働き手できへ、食べることに困るやうなありさまでありました。で、今まで何一つ働いたことのない次男が、職業にありつくことが出来なかつたのはあたりまへです。

彼には宿る家もありませんでした。身につけてゐた立派な洋服も靴もすっかり賣りはらつて、乞食のやうな汚ない破れた服を着てゐました。

彼は何も食べず、病氣の身體をひきづりながら街をさまよひました。雨の日、風の日には、彼は軒下にたゝさんだり、犬小屋に忍び込んだりして、あはれな日を送つてゐました。

彼は初めて、自分のあやまちをさとりました。そして田舎にゐた時の幸福な生活を思ひ出しました。

「お父さんは何うしてゐるだらう、兄さんは何うしたらう。」

彼の足は知らずくりに都をはなれて、なつかしい故郷に向つて運ばれました。

あゝなつかしい故郷、暖かい家、やさしい父親、彼の心は漸く蘇生るやうな氣がしました。そして村に着いて家の前に父親の姿を見た時、彼は何事も忘れて父親の傍にかけ寄つてその手にすがりました。

父親はみすばらしい自分の子の姿をながめて、非常におどろかれました、そして、自分の息子が、都でどんなに罪深い生活をしてきたか、手にとるやうに見えました。けれ共、父親は何事も言ひませんでした。彼は息子を抱きしめて『よく歸つてきてくれた、よく無事でゐてくれた。』と喜びました。

父親は下男や下女にいひつけて、非常な御馳走をこしらへさせました、そして村の人達を呼んで、息子が無事に歸つてきたことを祝ひました。

皆が喜んでゐる中に、長男の兄だけは非常に不平な顔をしてゐました。都で放蕩三昧をつくして歸つてきた次男を、祝ふ父親の氣持が判りませんでした。

「お父さん、あなたは何故こんな馬鹿げたことをなさるのです。」と、長男はブン／＼憤りながら言ひました。

「お前は又なんでそんなに不平なのかね。」と父親はたづねました。

「あれは都で放蕩三昧をつくして、財産をすつかり使ひはたして歸つて來たのです、そんな悪い息子が歸つて來たとて、何うしてこんな馬鹿騒ぎをなさるのです。」

「お前は金と心とどつちが大切だと思ふのだ。あれは悪い遊びをして金をすつかりなくして來た、けれ共あれは神様を心に持つて歸つた。こんな目出度

いことを祝はずにおかれるものか。」

と、父親は優しく兄をさとししました。

この父親の心は全く神様のみ心なのです。罪を悔い、神様を信じた時、人は初めて誠の生活をする事が出来るのです。

イエス様は又大變に子供を可愛がられました。子供の心程、神様の心に近いものはないと考へてをられました。

ある日のこと、母親が一人の可愛らしい子供を連れてイエス様の所に參りました、そして自分の頭に手をあてて、お祈りをして下さるやうにイエス様におたのみになりました。すると、イエス様のお疲れになつてゐることを、心配してゐた一人の弟子が、

「今日は駄目です、イエス様は大變疲れておいでですから。」と、きつぱりこ

とほりました。

するとイエス様は、その弟子をお叱りになつて、

「子供を私の傍によこしなさい、子供ほど神様のお心にならぬ者はない。」
と仰つてその子供を自分の膝に抱きあげて、祝福なさいました。この子供は
後にイグナシアスと言つて、名高い宗敎家になりました。

「子供ほど神様のお心にならぬものはない。」とイエスは繰返して弟子達に教
へになりました。「子供の生活ほど正しいものはない、それは神様とそつくり
の生活であると言つてもよい、子供は正しいものと美しいものを愛する、そ
して悪いことを恥じ、醜いものをきらふ、彼等は理窟でなく心のまゝに生活
する、そしてこの正しい心は常に伸びよう／＼としてゐる、これほど神様の
教へにかなつた生活がない。」

「それなのに私達大人は何うしてこんなに罪深い生活をしてゐるのでせう。」
と、一人の弟子が質ねました。

「それは子供の心を忘れて、世の中を見すぎたり、慾にかられたり、學問に
とらはれたりするためです。私達は誠の生活をするには、無邪氣な子供の心
に歸らなければいけません。」

皆さんは、このイエスの言葉を決して忘れてはなりません、無邪氣な、元
氣な、正直な子供の心で、いつまでも／＼ゐて下さい。

七 十字架になつたイエス様

危険次第に迫る——イエス様を三十金で賣つたユダ——イエス様弟子の足を洗ふ——最後の晩餐——ゲツセマネの園の祈り——天國にのぼつたイエス様

イエス様の教へは太陽がのぼるときやうに、人々の心から心へひろがつて行きました。そして、イエス様を讃える信者の言葉は、國をほめるよりも、王様をほめるよりも、もつとはげしく繰返へされるやうになりました。

イエス様はユダヤを支配してゐるヘロデ王の暴虐を見てゐると、何うして

もだまつてゐることが出来ませんでした。そして、ある時は、ヘロデ王の悪い政治や、あさましい所業をもていたく罵り、そして戦争は神の教へにそむく、最も恐しい罪惡であることを叫ばれました。

このことが、パリサイ宗の仲間や、祭司や、軍人などにひいたので、彼等は折さへあればイエス様を引捕へて牢屋へたゝき込まうと待ち構へてゐました。

イエス様の身にはだんく危険が迫つてきました。けれ共イエス様はそれを恐れませんでした、ひそかに姿をくらまし、次から次へ、場所をうつして、熱烈な言葉で、悪い政治を罵り、戦争の悪いことをとられました。

イエス様の弟子にイスカリオテのユダといふ者がゐました。彼は熱心にイエス様を尊敬してゐましたが、彼の考へ方は少し間違つてゐました。

十字架になつたイエス様

『今にイエス様はこの世に神の王國をたてて、王様になられるに違ひない、そしたら自分は大臣の位につくことが出来るだらう。』と思つておりました。このやうな考へは一人ユダばかりではありません、本當に神様の教へのわからない人は、皆イエス様を、立派な王様になるに違ひないと考へてゐたのでした。

けれ共、イエス様のお心にはたゞく神の教へがあるばかりでした、彼の教へは王様になることでなく、凡ての人間が平等に正直な子供の心に歸ることであつたのです。王様とか大臣といふ位は、神様の國では何の値打のあるものでない、神様の國で一番尊いものは、正直であることである、仲よく暮すことである、お互ひの罪を許し合つて、神様を信することである。だからイエス様は決して自分で王様になるなどとは少しも考へてゐなかつたので

す。

イエス様からこの旨を聞かされたユダは大變失望しました。彼は毎日このことを考へてゐました。自分が生命までかけてイエス様につくしたことは皆無駄であつたやうな氣がしました。而し、一方よく考へて見ると、イエス様の仰ることは一々理のある尊い教でもありません。それで彼は自分を何うすればよいか全く判らなかつたのです。

けれ共、ユダの心に燃えてゐる權力をあこがれる悪い慾望は、彼の正しい眼をくらましてしまひました。彼はある夜ひそかに、イエス様のありかを探してゐる祭司の長のある所に密告に参りました。

『私はイエスのゐるところをよく知つてゐます、若し教へたらいくら金をくれますか。』

これがその時のユダの言葉でした。昨日までは、師よ、神の子よ、救主よ、と尊んでゐたイエス様を彼は金をもつて悪い人間に賣らうとしたのでした。「それはありがたい。よく教へてくれた。お前に褒美として三十圓あげよう。」と、祭司は手を拍つて喜びました。

イエス様は自分の弟子から、さういふ悪い裏切者が出ることを、もうすでに知つてゐました。それが誰であるかといふことも知つてゐました。けれどもイエス様は決してユダをいましめようとしませんでした。彼はたゞ悲しく思ひました。人間の心の今更にたよりないことを知りました。そしてたよるものはたゞ神よりないことを、新らしく深く／＼感じられたのでした。

ユダが裏切つた結果、自分の運命が何うなるかもイエス様はよく知つてゐました。自分はきつとよくない祭司達につかまるに違ひない、そして死刑に

處せられるだらう、しかし、それは何うしてものがれることの出来ない自分の運命だと思つてゐました。いや、自分はむしろ進んで十字架にかゝつて死んで行かう、これは神様の意志なのだ、人間の罪を自分一人でせ負つて死ぬやうになされる神様のこゝろなのだ、そして人々は私の死に依つて、本當に神様を知り、正しい祈りの生活にはいつて行くだらう。そしてしたら、私の死は生きてゐる以上に尊い死である。人間が絶えない限り、私の死は人々にとつて力強い教となるに違ひない、とお思ひになりました。

ユダが密告した日は、水曜日でしたが、その翌日、イエス様はエルサレムのある信者の二階で、弟子達と晩餐を一所になされてゐました。弟子達が席について食事が初まらうとした時、イエス様は急に坐を立たれました。そして手拭をとつて腰にまきつけ、鹽に水を運んでもらつて、順々に弟子達の足

を洗ひ初めました。

弟子達はこのありさまを見て、實にびつくりしました。イエス様が何うしてさういふことをなされるのか、全く理解することが出来なかつたのです。

丁度、ペテロの番になつて、イエス様が彼の足をとらうとした時、ペテロはあまりの勿體なさに床に膝をついて、

「主よ、何卒そのやうな勿體ないことをしないで下さい。」と申しました。するとイエス様は、

「若しお前が私に足を洗はせないと言ふなら私とお前とは赤の他人である。」と言はれました。「え、そんなこと」と、今度はびつくりしてペテロは叫びました。「それでは何卒足ばかりでなく、手も頭も洗つて下さい。」弟子達の足を洗つてしまつてから、イエス様は申されました。

「私がお前達の足を洗つたのは、人間には、主人も弟子もないことを教へたかつたのだ、人間は罪の深いものではあるが、それ／＼によいところを持つてゐる、だから、お互に他人の足を洗ふ謙遜な、愛の深い心を持たなければいけない。」それから、イエス様は暫の間、うれひの深い顔をして無言で眼をつむつてをられました。吐息と一所に、

「だが、かうしてゐるお前達の中から、一人の裏切者が出るといふことは、如何にもかなしいことだ。」と仰せられました。

この言葉をきいた時、人々はハツとおどろきました。何か一大事が起るに違ひない、イエス様の身の上で大變化が起るに違ひないと、考へました。

「お前達は互に仲よく愛し合つてくれ。」と、イエス様は又言はれました。「私の教へは、お前達が愛し合つた時、初めて生き、いつまでも人々の胸につた

はるだらう、お前達は私を愛するやうに、お前達の兄弟も愛し合はなければならぬ。

この夜、イエス様に足を洗つていたいたエダは、又も打合せのため、祭司のところに出て行きました。何といふ恐ろしいこととせう。

夜深くまで語り合つた後、イエス様は十一人の弟子達と一所に、カンテラ山の西の麓にあるゲッセマネの園に祈りに参りました。

入口のところに八人の弟子をとめおき、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて、イエス様は園の内にはいつて行かれました。イエス様の心はかなしみの深い雲でおほはれておりました。

「神様、何卒私の苦痛をやはらげて下さい。」と、イエス様は脆いて神様に祈り初めました。「そして静かに、おだやかに、あなたのみ許に参ることの出来

るやうにして下さい、私は人々の罪になつてあなたのみ許に参ることを、この上なく幸福に思ひます、何卒私の死を祝福して下さい。」

イエス様は三人の弟子達に自分の胸のかなしみをもらされました、そしていつまでも眠らずに、この一夜を自分と一所に祈りあかすやうに願はれました、けれ共、三人の弟子達は神様に祈りをさげながら、いつの間にか眠に誘はれて、眼をとちてしまふ有様でした。イエス様は三度聲をかけて、彼等を眠からさましたが、又いつの間にかたわいなく眠に轉げ込んで行くのでした。今は、自分の悲しみを知り、自分をなぐさめるものは、神様より外にないとイエス様は寂しく思はれました。そして何事も打忘れて、神の名を呼ばれました。

額から油汗がながれ、唇は蒼白くふるへておりました、が、イエス様の眼は

次第に光明に輝き出しました。彼は自分の過ぎ去つた昔を思浮べました。それは苦しみと迫害にみちた、廣い大河のやうでした。だが、彼はその大河の兩岸が、美しい花に飾られ、歡喜の聲にみち、神の光に輝いてゐることを見ました。實に自分の正しい生活こそ、天國に行く道であつたことを知りました。彼は自分の眼の上に神の聲をききました。あゝ、天國の門はイエス様を迎へるために開かれたのでした。

「もう起きなさい。」と、祈りを終つたイエス様は眠つてゐる三人を呼び起しました。「私は今直ぐ罪人の手に渡されるのであらう。」
 間もなく、劔と棒を持つた兵士やパリサイ宗のやからが、ユダを先導にして、この静かな朝の園をおそふて來ました、そして遂にイエス様は、悪人のために捕はれてしまつたのです。



十字架になつたイエス様

審問は初まりました。そして正しきことを行ひ、正しきことを教へたイエス様は、遂に大守から死刑の宣告をうけられたのでした。

エルサレム市外のカルバリ山の死刑場に、イエス様は十字架を負ふて連れて行かれました。イエス様の眼にはかなしい涙がありました。顔は蒼白くしづみ、唇は愁に堅く結ばれておりました。

おゝ、誰か、いたはしいイエス様の姿と十字架を見た時、泣かぬ者があつたでせうか、嗚咽の聲は、天にひびき、地にあふれました。それは、イエス様の魂を天國に送る、かなしい奏樂であつたのです。

遂にイエス様はこの世を去りました。けれ共イエス様はながく、人の心に生きられました。それは死んだものではありません、死をとび越えて、一層深く大きく生きられたのです。人々の良心と一所に永遠に生きられたのです。

(をばり)

諸行無常

お釋迦様の
のお話



耶穌様とお釋迦様

一 お釋迦様の誕生

樹の下で御誕生——仙人の豫言——太子の惱み——四ツの門と人間の苦しみ——太子の家出

印度國の東北部、恒河のながれてゐるところに迦毘羅衛城といふ國がありました。大變豊かな國で、人民の心もやさしく、國王の淨飯大王も徳の高い方でした。

妃の摩耶夫人は隣國からいらしたやさしくて、伶俐で、大變美しい方であらせられました。

國は平和で、收穫がどつさりあつて、何一つ不足がない筈なのに、王様の心にも妃の心にも、ある悲しみがありません。晩餐の時、御散歩の折、二方はいつでも睦しく語らつてをられるのであつたが、いつの間にか、どちらかの顔が急に曇つてしまふのでした。

「王様、あなたは何うなされたのです。」と、妃がたづねると、王様は寂しく、

「今赤坊の泣聲を耳にしたのだ。」

「左様でございますか。」

妃もかなしきうに答へて、たゞうなだれてしまふのでした。王様の悲しみも、妃の愁ひも同じことでした。結婚してからも數十年になるが、世繼のお子様が一人も生れなかつたのです。

かうしてかなしみと愁に永く苦しまれてゐたのですが、ある秋のこと、妃は、白い大きな美しい象が、自分の胎内に宿つた夢を見ました。それから急に身重になつて、妃は目出度い出産のために、いよく自分のお里に歸られることになりました。丁度妃が四十五歳の年でした。

四月の日でした。美しい陽は輝き、野邊には花が咲き亂れ、小鳥がたのしく囀つてゐました。妃は幸福に酔ふた人のやうに疲れてゐる身を車の中に

横へてゐたが、車が、藍毘尼園といふ美しい花園にかゝつた時、急に御産氣を催されました。お伴の人々は大變おどろきになりました。そしてあはてて樹の下に床を造りました。そしてそこへ妃を運ばれたのですが、間もなく何の苦しみもなく、玉のやうな赤坊が産聲高く陽のかゝやく世界にお生れになつたのです。

王様のお歡びは一方でありませぬ。名を悉達多とおつけになり、さかんな宴會を催してお祝になりましたが、その七日目に妃は、産後の養生が悪かつたものか、おなくなりなさいました。

樹の下で生れた事や、妃が急におなくなりになつたことを考へて、王様は不吉な思ひにとらはれてしまひました。何となく王子の運命が氣になつてならないのでした、そこで森の中に住んでゐる阿私陀といふ仙人をお召になつ

て、王子の運命を占つてもらひました。

破れた衣を身にまとひ、草のやうに長い髪を肩にまで下げてゐる仙人はみちびかれて御殿に参りましたが、幼い王子の顔をじつと見つめてゐる中に、彼の顔色は歡びと光りに輝き、眼から涙さへおちりました。

「私は長い間、大勢の人相を見てきましたが、これ程美しい、氣高い御顔を拜したことがありません、この王子様は生長してお位をお繼ぎになると、四外を平定なさる大國王となられます、若し御出家なさるやうなことがありましたら、迷に沈む世界の人をお救ひなさる尊い方になられます。たいかなしいのは、私はそれまで承らへて、王子様の行末を見ることが出来ないことでございます。」

王様はこの仙人の話をきかれて非常にお喜びになりました、そして早く成

長して自分のあとを繼ぐやうに心に祈りました。

悉達太子は大變伶俐な方でした、十歳の時には哲學や藝術の奥の奥までお學びになり、武術はその師匠も舌をまく程上達なされました。けれ共、太子の性質はいつでも沈み勝でした、その眼はいつでも深い愁ひを求めてゐるやうに思はれました。

十四歳の時でした。ある美しい天氣の日、太子は美しく飾り立てた車に乗つて、臣下と一所に野遊びに参られました。そして東の門を出でられたのですが、ふと、卑しい姿の老人が、あへぎく杖にすがつて通るのを眼にとめられました。

「あれは何者です。」と、太子は臣下にたづねました。

「あれは年寄でございます。」

「何うしてあんなに弱々しい姿をしてゐるのです。」

「もう餘命がいくばくもないのです、誰でもあゝなるのが運命でございます。」

この何げない臣下の言葉は、太子の胸には針をさされるやうな感じがしました。太子は學問の上では年寄のことを知つてゐましたが、眼のあたり、あはれな年寄の姿を見るのが初めてでした。太子はしみごとく人の運命のはかなく悲しいものであることを感じられました。

その後太子は、路傍で苦しんでゐる一人の病人を見られました。又、西の門を出ようとした時、床に横はつてゐる一人の人を取圍んで泣き悲しんでゐるありさまを見られました。

「あの人達は何をしてゐるのです。」

太子は車をとめて、たづねました。

「誰かが死んだのでございます、その身内のものや、友人達が集まつて泣き悲しんでゐるのでございます。」

「はかない運命だ。」かう悲しげに仰つた太子は、すぐ車を返して、御殿にお歸りになりました。

太子の愁ひはだん／＼深くなつて行きました、そして今は自分の生活に對して疑ひを持つやうになりました。

「私は太子として毎日、遊んで、榮華に日を暮してゐる。それなのに、世間では、病にとりつかれたり、死にあつたり、その他澤山の苦しみを胸に抱いて、その日をあへぎ／＼暮してゐる人が澤山ある。私の生活はたしかに正しくはない。私が若し本當の生活をしようとするならば、自分の身分をふりす

てて、民の中へはひつて、苦しみを共にし、歡びを共にしなければならぬ。それが本當の人間の生活といふものだ。』かうお考へになりました。

ある日のこと、太子は徒歩で城を出て村端にお出になりました。その時太子は、法服をまとふた一人の修行者が、手に鉢を持ち、しづかにやつて來るのを見ました。太子はその修行者の姿にじつと眼をとめました。

太子には不思議な感じがしました、その人の歩き方でも、姿でも、顔でも、少しも亂れてゐません。静かにおちついて、足は一つ一つたしかに地上をふんでゐるやうに思はれるのです。それは悲しみや愁ひを忘れて、堅いある信念に生きてゐる、尊い人のやうに思はれました。

「あれは、何者です。」と、太子は臣下をかへり見てお尋ねになりました。

「あれは沙門といふ修行者でございます。」

「沙門……」

「はい、眞の道を求めるため、家を棄て、妻子を棄てて、山や野に修行をつみ、慾をすてて清い生活をしてゐるものでございます。」

「さうか。」と、太子は短かく言葉をきつて、そのおちついた、修行者の姿をいつまでも見送つてをられました。

「あれこそ、正しい生活かも知れない。」と太子はお考へになりました、「然し、自分一人のために家を棄てたり、妻子を棄てたりすることは、本當に正しい生活なのだらうか、凡ての人が、それを正しいことにして、さういふ行動をとつたら、この世は、かなしみに、かなしみを重ねることになるのではないか。」

太子は御殿にお歸りになりました、そして修行者に對するあこがれの心と、

疑ひの心はいつまでも太子の心をなやますのでした。

けれ共、考へれば考ふる程、働かないで、他人のものでその日を榮華に送つてゐる自分の生活が、苦しいものに思はれました。その生活は、家を棄てることよりも、父を棄てることよりも、もつと／＼大きな罪のやうに思はれました。太子の心は次第に家出の方に傾いて行くのでした。

太子の穩かでない心の内を見抜かれた王様は非常に心配なさいました。そして何うにかして、太子の沈んだ心を他の方に向けたいものだとお考へになりました。

太子が十六の時、王様は三時殿と言つて、春秋の住居、夏の住居、冬の住居、それ／＼時候にあつた三つのきれいな御殿をつくつて大勢の美しい女達を呼び寄せ、この世の樂しみといふ樂しみをあつめて、太子の住居となさい

ました。

けれ共、このやうな表面のいざなひでは太子の心は何しても動きませんでした、王様が苦心すればする程、太子の心は別途にそれて行くのでした。すつかり、困りはてた王様は、太子が十九の時、無理にすゝめて、隣國の拘利城といふところから耶輸陀羅姫を迎へて、太子の妃となさいました。

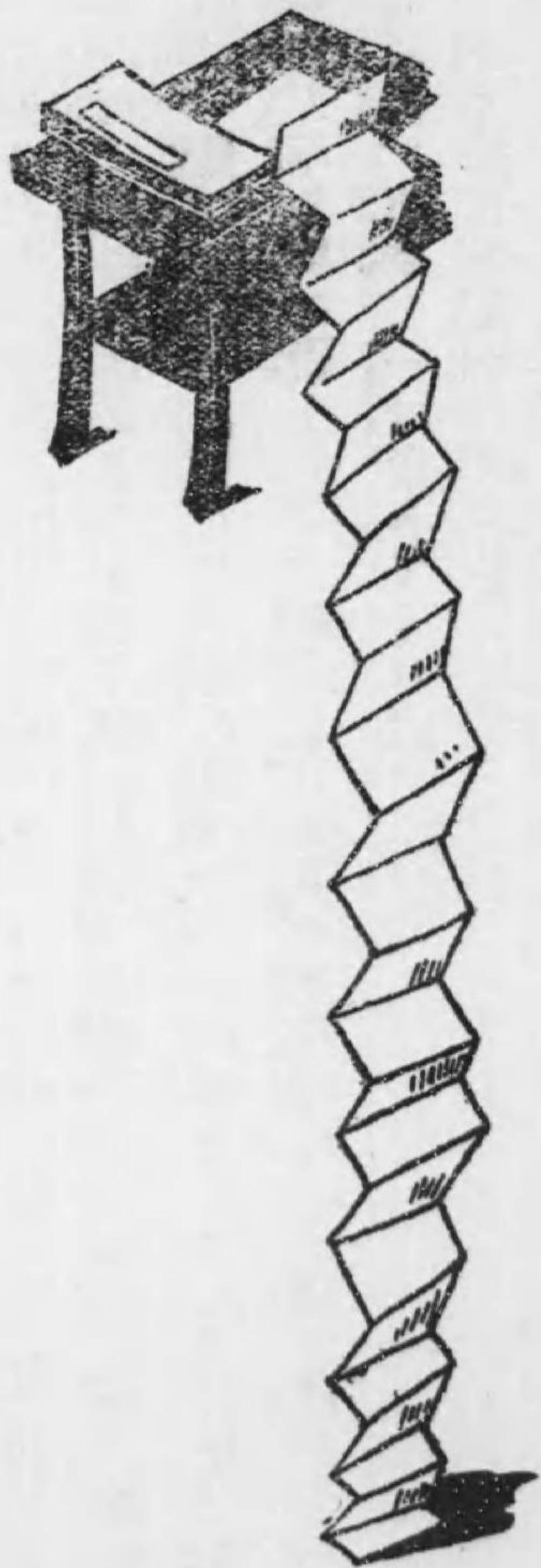
盛大な儀式と賑かな宴會が催されました、そして太子は、妻を持つ責任の重い人となられました、さういふ行々しい儀式や宴會を見るにつけ、自分の生活のあやまつてゐることを、ますます強く感じるのです。

十年の睦しい生活が時と一所にながれて行きました、それと同時に、太子のなやみも十年を経て、漸く實を結ぶやうになりました。

妃に男子のお子が生れて、迦毘羅衛城の世繼に安心なされた太子は、遂に

耶蘇様とお釋迦様
位を棄て、
宮殿を棄て、
父を棄て、
妻子を棄てて修行の途に赴かれたのでございませう。

一〇八



二 新らしい生活へ

頭を剃つて出家となる——跋迦婆仙人との問答——五人の弟子
——阿羅邏仙人との問答

新らしい生活

一〇九

十二月八日の夜でした。

暖かい印度の國も、冬の夜風だけは、さすがに人の心に、あはれを呼び起しました。

冷かな蒼白い弦月が空にかゝつてゐました。城も、樹も、人も、鳥もみな寢静つて、庭園には蟲のかなしい聲があはれにひびいてゐました。

太子はそつと御殿をぬけ出でて、急いで廐の側にある宿直所へやつてきました。胸の内はおどろきや、悲しみや、未來をのぞむ望みや、初めの冒険に、亂れきつてゐました。何を考へていゝか判りませんでした。今はたゞ一刻も早く駒に鞭うつて、新らしい生活へ突進しようと思ふばかりでした。『車匿、車匿、一寸起きてくれ。』と、太子は低聲で呼びました。

『何方様です。』

『私だよ、悉達だよ、早く……』

『これは太子様、』と車匿はあはてて宿直所を飛出して恭々しく手をつきました。『太子様、今頃何うなされたのでございます。』

『もうそんな、奴隷のやうな、へりくだつた禮儀はよしてくれ、早くカンダカを曳いてきてくれ。』

車匿は太子のたゞならぬ様子に、びつくりしてしまひました、そして狼狽して、太子の愛してゐる駒を厩から引出してきました。

太子はそれに飛乗ると、車匿を先導として、東南の道をすん／＼進んで行かれました。

迦毘羅衛城もいつか後に急ぎてしまひました、もう十七里も駆けつゝけた

のでせう、夜明の明星がキラ／＼輝き出す頃には、太子主従はアワミ河の邊にある深い森にお着きになりました。

この山の奥には、跋伽婆と言つて名高い仙人が住んでゐました、彼は苦行婆羅門といふ主義の學者で、大勢の弟子達と一所に、山にかくれて烈しい苦しみの修行をやつてゐたのでした。

車匿と別れた太子は先づ髪をすつかり剃り落して坊主となり、美しい袖の召物を汚ない衣に更へて、勇しく山へ山へと登つて行きました。

仙人の住居に着いた時、太子は先づその不思議な光景におどろきになりました。

彼等修行者は一人として満足な着物を着てゐる人はありませんでした、半裸體で草を綴つたものや、木の皮を結へたりしたもので身を包んでゐるので

した。修行者は決して米粒などを口に入れませんでした、食物は木の枝や、草の實でした。中には水ばかり飲んで皮せ衰へて眼ばかりらんと光つてゐる人もありました。

それにその修行は極度に苦しいものでした、片足をあげたまゝ幾年も立ちつゝいてゐる人、火に身體を炙つてうん／＼うなりながら、苦しさをしのんでゐる人、水につかつてゐる人、足を樹の技に吊して年中倒にぶら下つてゐる人、地の上に裸體で寝てゐる人、髪の毛や髭を一本／＼ぬいてゐる人、それは、實に地獄の苦しみを、眼の前に見るやうなありさまでした。

太子は暫くの間そのすさまじい苦業のさまを見てゐましたが、心は次第に疑ひに閉ざされて行きました。

『かうした苦行は本當に佛の心になつてゐるのであらうか。』

『あのやうな苦しみを、何の爲にするのでせうか。』と、太子は跋伽婆に向つてたづねられました。

『この世の中のあさましさは、皆罪深い身體のためにつくられてゐるのです、だから、此の世で罪深いこの身體を責め苦しめると、後の世には天に生れて楽しい生活をする事が出来るのです。』と、跋伽婆は答へました。

『まことに先生の仰ることに一理がございます、罪深い身を苦しめた報として、次の世には天國に生れて楽しい生活をする事が出来るといふことは本當でせう、而し、その次の世には何うなるのでせう、楽しい生活をした報として、又苦しい生活、あさましい地獄の生活をしなければならぬのでせうか。』

これは、實に立派な質問でありました。さすがに跋伽婆も、この間に對し

ては何事も返答が出来ませんでした。

太子は心の中ですつかり失望をなさいました。

『私の仕へる師はこの人でない。』と、すぐおさとりになりました、それで一夜彼の宿に眠つて、翌朝主人に暇を告げて摩揭陀國の方へ向つて出發いたしました。

上り下りのはげしい山道を四五里程歩いてきた時、太子は道傍に藪蒼と繁つてゐる大樹を見つけました。かなり疲れてもゐたので、太子は、その大樹の下に茂つてゐる草の上に腰を下ろして、靜かに深い冥想に耽つてゐました。そこへ丁度、王様の命を受けた大臣達が、大勢の家來を連れて、太子を探して参りました。大臣は繰返し、老いた王様や、まだうら若い妃の嘆を申されましたが、太子の心は鐵のやうに堅く、何うしてもその願ひを許しませんで



した。

「では太子様、あなた様は、何うしてもお歸りなさらないのでございますか、高い王位をむざ〜とお棄てなさるのでございますか。」

「高い王位、それは何だ、私はそんなものより正しい人間の生活を望んでゐるのだ。もうお前達の言葉はき、たくない、早く歸つてくれ。」

かう言つて太子は堅く口をつぐんでしまはれました。

大臣達は最早太子の堅い發心を何うしても翻すことは困難であると思ひました。それで五人の信心のあつた人達を、太子の許にのこし、泣く〜別れを告げて、迦毘羅衛城へ歸つて行きました。

五人の弟子と共に太子は阿羅邏仙人の許に急がれました。有名な恒河を越えて、摩揭陀國の王舍城をお通りになつた時、國の人々は太子の噂をき〜つ

たへて集つて尊い太子の姿を拜みました。

間もなく太子の一行は摩揭陀國の國境を越えて陀羅邏仙人が住んでゐる山の奥に着きました。仙人の弟子達はかねてから、太子のことを噂でき、知つてゐたので、

『それ、王様の位を捨てて發心なされた迦毘羅衛の太子がお出になつた。お迎へ申さう。』と言つて、ひしめき合つて騒ぎ初めました。

仙人はこのことをきくと非常に喜ばれました、そして弟子達と一所に太子を途中までお迎へして、自分の住居に案内いたしました。

仙人は太子の凜とした尊い姿を眺めて、この方は、今にきつと民を救ひなされるえらい修行者におなりなされるに違ひないと、見ぬきました。

『遠い所をよくお出でになりました。』仙人は言ひました『あなたの發心はま

ことに目出度いことに思ひます、何卒心を碎いて修行をつみなさい。』

『身を粉』にくだいても、迷からさめる覺悟でございます、何うぞ私のために生老病死をたちきる道を教へて下さい。』

『お話しませう。』と仙人は白い髭をなでながら答へました。『私達は暗い所から生れて來たのです、そしてこの光のない暗いところに、自分を信じ過ぎるおごりの心が芽生へるのです。愛といふものや憎しみといふものが生れてくるのです、そして遂に深い苦しみなやみにとらはれるのです。』

『ではその苦しみやなやみを忘れるには何すればよいのですか。』

『それには先づ出家をして慾を忘れ、静かなところに住んで苦しみに心をきたえ、凡ての悪い考へを追出してしまふのです、すると、何も考へない無想の極地にいたります、これが學者の最も高い願ひです。』

『お話しはよく判りますが、私はまだそれだけでは満足することが出来ません』と、太子は申されました。『私は自分といふことを忘れることは出来ないものだと思ひます、自分をなくしたものは、石やかけらと同様、死物だと思ひます、人が一生肉體を持ち、心を持つてゐる以上、迷や、苦しみを忘れることは出来まいと思ひます。私はその迷や苦しみの中に光を求めたいのです、さとの教へを知りたいのです。』

この深い質問にはさすがの仙人も眼をみはつておどろくばかりで、一言も答へることが出来ませんでした。太子はこゝでも又失望しなければなりません。そこで五人の弟子と一所に再會を約して阿羅邏仙人の許を去られました。

當時、阿羅邏仙人とならんで名高い學者に鬱陀羅といふ仙人がゐりました。

太子はこの仙人ともあつていろいろ語られたのですが、何うしても満足することが出来ませんでした。

最早、太子は自分の師を尋ねることをあきらめねばなりません。印度ではこの二人以上にえらい仙人がゐなかつたからです。そこで太子は自分の努力で、人の世の、深いさとりを知らうと決心しました。

耶蘇様とお釋迦様



三 苦行六年の後

苦行に對する疑——自然の教——五人の弟子去る
——遂にさとりを開く

加閼山の山中に、尼連禪河といふ美しい、清い流が
ありました。そのほとりに住居を定めて、太子は五人



の弟子達と、苦行の生活を開かれました。

太子はすつかり食をたつてしまひました。一日に米一粒、あるひは胡麻を
一粒だけ食べて暮しました。はげしい苦しみと共に、その肉體は見る／＼や
せ衰へてしまひました、けれ共太子は決して屈しませんでした。更に二日米
一粒、三日に一粒、五日、七日に一粒といふ風に苦しみを追ふて行きました。
そして一月たち、二月たつ間に、太子は骨ばかりにやせ衰へ、たゞ眼ばかり
鋭くかゝやいてゐるあさましい姿となりました。

六年の長い歲月は過ぎました。太子は更に／＼苦行をすゝめて行つたので
すが、さて、さとりの光は一向にみとめることが出来ませんでした。

考へれば、六年前の心と、六年後の心の内には、少しも變りはないやうに
思はれました。

「自分^{じぶん}はあやまつてゐたかも知れない。」と太子^{たいし}は漸く^{ややく}苦行^{きぎやう}に就いて疑ひ^{うたが}を持つやうになりました。「何故^{なげ}、人はさとりをひらくためにこれ程^{ほど}身を苦しめなければならぬか。」

この疑ひ^{うたが}は日^ひを経るに從つてますます大きくなつてゆきました。ある日のこと、太子^{たいし}はぼんやりそのことを考へて尼連禪河^{にれんぜんが}のほとりに水を飲みに參りました、そして手をついて水面^{すゐめん}に口^{くち}を持つて行かうとした時、太子^{たいし}は白い花をつけてゐる一本^{ほん}の小さい木^きを見て、ハツと思はれました、太子^{たいし}は水を飲むことを止めて、蘇生^{よみがへ}つた人のやうにひざまづいて叫びました。

「私は間違つてゐた！」と、太子^{たいし}の眼^めは希望^{きぼう}にかゝりやき出しました。「あの花は何故^{なげ}咲いてゐるか、そして何故^{なげ}散るか、散つて咲く、咲いては散る、これはあの木^きの正しい生活^{くらし}なのだ、今、あの木^きを苦しめて、人の手^てで寒氣^{かんき}にあて

たり、水^{みづ}になやましたら、何うなるだらう、あの木^きは枝^{えだ}に花^{はな}をつけなくなるだらう、それは何^{なに}にならう、それはむしろ罪^{つみ}である、あの木^きはあのまゝであつてこそ、正しいのだ、そこに自然^{しぜん}の深い教^{おし}へがある。」

太子^{たいし}はかう考へられました。

その翌日^{よくじつ}から太子^{たいし}はすつかり苦行^{きぎやう}を思止^{おもひとどま}りました、そして普通^{ふつう}に食べ、普通^{ふつう}に働いて、その他^{ほか}は靜かに坐つて考へにふけらるのでした。

このにはかに變つた太子^{たいし}の様子^{やうす}を眺めた五人^{ごにん}の弟子^{でし}は、忽ち太子^{たいし}をあなどり初めました、太子^{たいし}の深い考^{かんが}へを知らないで、太子^{たいし}が苦行^{きぎやう}にたえかねて修行^{しゆぎやう}を棄てたのだと考へたのです。それで彼等^{かれら}は言ひ合せて、この山^{やま}を去つてしまひました。

五人^{ごにん}の弟子^{でし}には去られたけれ共、太子^{たいし}の心^{こころ}は、ある光明^{くわうみやう}と歡び^{よろこ}で一杯^{いっぱい}で

した。さとりが今一步のところ、近づいてゐることを感づかれました、そしてひたすら、樹の下に足をくんで冥想到に耽つてをられました。

この楽しい静坐は七日七夜つづきました。その第三夜目に太子は解脱をお開きになつたのでした。

『人が絶間ない苦しみや欲望にかつ爲めには、善い眼をくらす無明を破らなければならぬ。』と、思ひになりました、その無明を破るには何うすればよいか、即ち、

『正しく見ること、よきことを考へること、正しい言葉を使ふこと、行を正しくすること、眞面目に自分の仕事に精を出すこと、心をおちつけること、考へることが皆正しくなければならぬこと、常に自分をかへり見て、心を安らかにすること、』この八つの教へを堅く守れば人は、無明を破ることが出来

て、進んで、老ゆることも、死ぬことも悲しくなく、苦しみもなく、なやみもなく、解脱の境地にいたることが出来ると考へられました。

太子は又も十七日の間静坐をつづけました。心は歡びにあふれ、眼は光明に輝きました。

かうしてさとりを開いた太子はいよ／＼人民の中へ行つて自分の教へを傳へようとお考へになりました。

太子の御年三十五歳、初めて、釋尊としての新らしい生活が初まつたのでございます。



四 五人の弟子と再會

五百の商人の群——五羽の小鳥の話——人間がまぬがれない八つの苦しみ

お釋迦様は六年前、再會を約束した阿羅邏仙人の許に、先づ自分のさとりを傳へようと思はれました。そしてなつかしい尼連禪河の住家を棄てて、仙人の住んでゐる山へと志しました。

然し暫く行つてお釋迦様は仙人が數日前に他界したことを聞き知つて非常に力を落しました。『では、先づ自分を見棄てた五人の弟子達の許を訪ねて行かう、として自分の本心を打明け自分の教へを傳へることにしよう。』と考へました。

波羅斯國へはいらうとした時、お釋迦様は、ある小さな村で五百人のある商人の群に出會ひました。商人の頭の跋陀羅斯那と跋陀羅梨の二人は信心の深い人達であつたので、お釋迦様の尊いお姿を見て、この方は非常に徳の深いありがたい御出家様だと考へました。そして蜜妙と云ふ非常に滋養のある

おいしい物をどつさり差上げました。

この頃の印度の習慣として出家が食物を受けるときは素手を差出して受けたのでした。けれ共、初めておくり物をされたお釋迦様は、何うしても素手をそのまゝ出すことが出来ませんでした。

「何うもありがたう。」と仰つて、暫くの間ためらつてゐました時、そこへ見知らない一人の男がやつて来ました。そしてお釋迦様の前に恭々しく頭を下げると、石の鉢を差出しました、そしてそのまゝ何も言はずに通り返してしまひました。

お釋迦様は石の鉢を手に持ちながら、呆然とその男の後姿を眺めてゐました。不思議な、涙ぐましいありがたさが、お釋迦様の胸にわいてきました。お釋迦様はおくり物を鉢にうけてから、商人達に教へを説かれました。

「佛に仕へる出家にもものをおくることは、自分の信心の心を佛の前に示すことです。たとへその出家がよくない人であらうが、よい人であらうが、さういふことは、その人にとつては問題になりません、佛様に差上げるのです。まことの人の心にさゞげるのです、その精神を失はない人は、一生の幸福を得ることが出来ます、清いさとの生活を送ることが出来ます、ただ佛の爲におくりものをなさい、自分の名譽のため、おごりのために施をする時、地獄の鬼に自分の心を賣るのです。」

五人の弟子達は婆羅奈斯國の鹿野苑で、お互に修行を積んでゐました。ある日のこと、彼等は自分達の修行場にやつてくる一人の若い出家の姿を見つけてました。

「おや、誰か参つたやうです。」

「何處か見覚えがあるやうな方ですな。」

出家の姿は次第に大きくなつて見えました。

「おや／＼あれは私達の師の太子様ですよ、修行を棄てて、凡人に歸られた迦毘羅衛城の太子ですよ。」

「今頃何で私達の許を訪ねて來たのでせう。」

「私達はあんな卑しい人と口をきいてはいけない。」一人が強い言葉で叫びました。最早五人の弟子達には、太子といふ尊敬の念はありませんでした。邪道の出家としかうつらなかつたのです。それだけ當時の印度の人は宗教に深い心を寄せてゐたのでした。

「勿論の事です。」と、次の一人が應じました。

「最早彼は私達にとつて太子でも師でもありません。私達は禮をする必要も

ないと思ひます。」

「勿論さうです。」

五人の弟子達は口々に申合せて、輕蔑の眼でお釋迦様のお出でになるのを見てゐました。

が、やがて姿が彼等の眼の前に近づいた時、彼等はお釋迦様の悠然とした高貴な威力に魅せられて、まるで言ひ合はしたやうに我知らずに一所に立ち上りました、そして丁寧な禮儀をいたしました。

「久振りでした。」とお釋迦様は、おだやかなやさしい言葉で申されました。

「あなた達も折角修行をつゞけなすつて目出度いことです。」

「はい。」と、人々はうなだれて答へました。

「私も漸く解脱を開くことが出來ました。」と、お釋迦様はにつこり微笑まれ

ました。

「何卒、その解脱を私達に教へて下さい。」と弟子の一人である僑陣如が言ひました。

「お話しませう、がその前に、私は今山で面白いことを見て来ました。一本の木に五羽の小鳥がとまつてゐたのです。まだく赤坊達でしたよ、その赤坊達がお母さんが山へ餌をひろひに行つてなかく歸つて来ないと言ふのでポツ／＼お母さんの不平を言ひ初めたのです。(お母さんはあまりひどい)と一羽が言ふと次の一羽が、(こんなにもじがつてゐることがわからないのかしら)と言ふのです。(あんまりだ)(情知らずだ)(きつと山の小母さんとおしやべりをしてゐるんだ)(僕はお母さんが歸つてもだまつてゐる)(私は睨みつけてやるわ)(いや僕はお母さん馬鹿ツと言つてやる)と各自ががやく／＼言

つてゐたのですよ。ところへ山へ行つて、せつせと働いてゐたお母さんがどつさり御馳走を持つて歸つて来たのです。すると何うでせう、子供達は今までの不平はすつかり忘れて、皆で、お母さん、お母さん、と、とりすがるのです。私はその有様を眺めて涙をこぼしました。」

かう仰つてお釋迦様はまたやさしくほゝゑられました。

「何うです皆さん。」お釋迦様はうなだれてゐる五人の弟子を眺めながら言葉をつぎました。「美しい心ぢやありませんか、そこに佛のさとしがあるのです。皆さんは私が土産に持つて来た御馳走を食べて下さいますか。」

五人の弟子達はお釋迦様のこの話をきいて胸をえぐられるやうな氣がいたしました。その話は自分達がお釋迦様を悪口言つたこととそつくりなのです。「何卒、あなたの尊いおさとりを私達に教へて下さい。」

『お話しませう。私は何んであの時皆さんに何事も告げずに、苦行を棄てたかといふに慙うです、苦行は丁度焚火に水を注ぐやうなものです。水をそげば火は決してよく燃えはしません。それと同じ理窟で、身體を苦めると同時に心も苦しむのです。心が苦しくて何うして佛のありがたい慈悲をうけることが出来ます。佛の慈悲は心が静かにならないと味はうことが出来ないのです、火をよく燃やすには木をたやしてはなりません、水を注ぐと光はおこりませぬ。光がなくて何うして無明をてらすさとりを開くことが出来るのです。心と身體とは一つです、食べることと、心をねることは一つです。これを忘れて苦行をいくら重ねたところで、何うして佛の解脱を會得することが出来ませう。』

五人の弟子はこの威嚴のあるお釋迦様の言葉に、今はまるで悪い夢から醒めたやうな氣がしました。そして自分達の心を省みて、永年苦行を重ねてゐながら、未だ愚かな考へから脱することが出来ないであることを、泌々恥しく思ひました。

『この世には八つの苦しみがあります。』と、お釋迦様が更らに教へをすゝめられました『一つは生れる苦しみ、二つには年老る苦しみ、三つには病の苦しき、四つには死ぬる苦しみ、五つには愛する者に別れる苦しみ、六つには怨しき者に會はねばならぬ苦しみ、七つには求める物を得られない苦しみ、八つには自分のために起る凡ての苦しみ、この八つの苦しきから、誰でも脱れることが出来ないものです。ある人は私にはそんな苦しきは一つもないといはれるかも知れませんが、けれ共それはまだ自分の苦しみに氣づいてゐないので、丁度水に灰がかゝつてゐるやうなものです。一度灰の上に乾いた草を

あけて見なさい。忽ち火を呼んで燃え上るやうに、人の苦しみはいつでもか
 くれてゐて、機會ある度に燃え上るのです。ではこの苦しみから何うすれば
 のがれることが出来るか、それは佛を信することです。大我に生きること
 です。子供の死に會つたら、その苦しみを生かして、佛(自然)の心と一つにな
 るのです。病に苦しむ時は、その苦しみの中から佛の名を呼ぶのです、心に
 佛を呼び迎へるのです。その時苦しみは消えて安らかな心が來ます。喜びが
 湧いて來ます。人々は誰でも佛に仕へなければなりません、佛に仕へるとい
 ふことは八つの正しき道を守ることです。その時人はさとり道の道にはいるこ
 とが出來ます。』

かう言つて、お釋迦様は八つの正しき道についてじゆんじゆんとお説きなさい
 ました。

五人の弟子はこの深いお釋迦様の教へにすつかり感動しました。世の中が
 急に明るくなり、歡びが天から降つて來るやうな氣持がしました。そして五
 人の者は再びお釋迦様の弟子になることを、堅く誓ひました。

五 富豪の子が出家となる

亂らな宴會のありさま——耶舎の家出——佛弟子となる——父の悲嘆——佛教四方にひろまる

丁度その頃鹿野苑の近くの町に耶舎といふ富豪の息子がありました。金が自分の自由になるところから、彼は美々しい着物を着、酒を飲んだり、女とははむれたりして、毎日遊墮な日を送つてゐました。

ある夜のこと、彼は大勢の女をあつめ、よくない友達と酒を飲みかはしましたが、夜更けて大勢の者と一所に、そのまま宴席に眠つてしまひました。

夜中に喉の乾きを覚えて彼はふと眼をさました。そして眼を見開いた時、あまりの汚ない光景に彼はははつとおどろいてしまひました。まるで美しく飾られた大廣間も、塵埃場と、何の變るところがありませんでした。肉は食べ荒され、銚子はころげ、酒は流れ、器物は方々に棄てられてゐました。さうした中に人々は倒れて、いぎたなく屍をかいてゐるのでした。

これこそ、全く醜い地獄のありさまでした。彼は一時にぞつとすると、その場にゐたたまらず、まるで地獄からのがれるやうな氣持で戸外に飛出しました。

美しい星空でした。夜風は甘いかほりをふくんで彼の顔を撫でました。彼は眼をあげて美しく輝いてゐる星空を見ました。そして自分の生活の如何に間違つてゐたかをしみくと考へました。



『私は生れて一度も働いたことはない。』と彼は獨言しました。『皆他人の働きで、他人の汗で榮華な生活をしてきたのだ。これは最もおそろしい罪に違ひない。』

彼はどうすれば、この汚れた生活をすてて今までの罪のつぐなひをするところが出来るだらうか、と考へました。

『私は今日までの生活を棄てよう、凡てはそれからである。』
かう決心して、足にまかせて門外の道を彼方へくと進みました。

やがて彼は恒河を越えて、鹿野苑にさしかかりました。彼はそこで尊いお釋迦様の姿を拜することが出来たのでした。

『何卒、私をお救ひ下さい。私は何うすればよいのでございます。』と、耶舎はお釋迦様の前に身を投げて叫びました。

『よくお出になりました。』と、お釋迦様は耶舍の姿に眼をおとして、優しい言葉で申しました『そなたは人の身は變り易く、苦しく、又自分の力ないことを知つてゐますか。』

『はい。』と、耶舍は力なく答へました『私は自分が判らないのです。』
そこで、お釋迦様は八つの正道をふむべきことを、こんくおさとしになり、戒の歌を作つてお聞かせになりました。

心の清く欲なきを

まことの出家とこそは云へ

身は曠野に晒されて

やつれし姿よそふとも

むさぼる心はなれずば

出家の名のみ恥しや

善きもあしきも行の

起るは凡て心より

さとりに進むよき人は

皆心こそ本とすれ

この歌をきかされた耶舍は、初めて自分がけがれた罪から救はれたことを知りました。彼は、決心して出家となることをお釋迦様に乞ひました。そして美服をすて、髪を切り、袈裟に身をつゝんで、新らしい沙門となつたのでした。

翌朝凡ての人が眼をさました時、耶舍の姿が見えないので、家内の人々は非常におどろきあはてました。殊に父親のおどろきと悲しみは一通りではあ

りません。氣が狂ふまでに泣き叫んで、耶舎の姿を求めて外に飛出しました。恒河のほとりに來た時、彼は路傍の草叢の中に耶舎のはいてゐた靴がぬぎ捨ててあるのを見つめました。

「おゝ、こゝに耶舎の靴がある、ではまだ死んではゐまい。この道を通つて遠くへ去つたに違ひない。」

憊う思つたので、彼は足を早めて子の後を追ふて參りました。

お釋迦様は狂はしい姿で鹿野苑にやつてくる人を眺めて、すぐ耶舎の父親であることをおさとりになりました、それで一先づ耶舎を物陰にかくして、そして彼の來るのを待ちうけました。

「やさしい御老人、あなたは心に何か苦しみを持つてをられますか。」

かう、言はれて彼ははつと思つてお釋迦様の姿を仰ぎ見ました。その身に

はいたつて汚ならしい衣をまとふてをりましたが、人を射る氣高い光に、彼は忽ちひざまづいて、

「尊いお方様、私は重い苦しみを荷ふてをります、何卒私を救ふて下さいませ。」

「あなたはわが身と心のたよりなく、苦しみの多いことをさとりになりましたか。」

「はい、初めてたよりない人の力を知りました。私は昨日まで自分の思ふことがかなはぬものは何一つないと考へてゐました、けれ共、それははかない考へでした、私は人の身と心の頼み少ないことをしみぐさかつたのでございます。」

「あなたは何んでそんなに悲しんでゐられるのですか。」

『はい、恥しいことですが、私のたゞ一人の子供が家出をしてしまつたのでございませう、方々探し廻つてゐる中、恒河のほとりで靴を見つけてましたので、此方に参つたに違ひないと考へて、こゝまで参つたのでございませう。』
 やがて、お釋迦様は、出家姿になつた耶舎を、この場に呼び寄せました、すると、これを見た父は狂氣するまでに喜んで、不思議な姿の我が子にとりすがつて、

『お、耶舎か、お前は無事であつたか、ありがたいく、然しこの姿は……』
 『お父様、喜んで下さい、私は初めて迷からさめて生れ變つたのです、私はこれまで富貴な生活をして、他人を苦しめ、罪を重ねて参りました。私は今その罪をさつたのです、私は出家となつて、この世の人の幸福を願ひたいと決心しました。』

『おゝさうであつた、お前がそこまで立派に決心したのを、私は何で悲しまう、むしろ、私はお前に恥かしい位だ。では私もお前にならつて、清い晩年をおくることにせう。』

そして、彼はお釋迦様に願つて、自分をも弟子の一人に加へて下さることを願ひました。お釋迦様はそれをとめて、

『あなたは、御自分の財産を凡て貪しいものに施してやりなさい、それは頭を丸めて出家になるのと同じことです。』
 と言つて、尊い教へをわかり易くおときになりました。

この老人は優婆塞と言つて、俗人のまゝで初めて佛弟子とられた方です。この二人が弟子になつてから、お釋迦様の徳と教へをしたつて集まつてくる人は日に日にふえて参りました、そして忽ちの中に五十幾人の人々がお釋

迦様の教へをうけて佛弟子に歸依いたしました。

お釋迦様は五十人の弟子を方々につかはすと、自分は少ない弟子と一所に摩揭陀國に傳道に參りました。そしてこゝでも、お釋迦様の尊い教へと、高い徳は人々を忽ち正道に救ひあげられました。有名な大哲學者の優樓頻螺迦葉、那提迦葉、伽耶迦葉を初め、千人以上の人々がお釋迦様の下にあつまりました。そしてやがては、國王を初め、諸大臣まで、お釋迦様の教に心から敬服して佛弟子とられました。



六 お釋迦様の歸國

父君のお迎へ——姫君の悲しみと恨み——姫君との對面——お釋迦様の教全國にひろまる——國難來る——他を苦しめる者はやがて自分も苦しむ

元來印度の國は哲學や宗教の盛んな國であつたので、お釋迦様の噂は忽ち全國になりひびきました。そしてありがたい佛をがみたいために、又は尊い教へに浴したいために、集つて來る人は、日に數十人、數百人を數へる有様でした。

この噂は勿論毘羅衛城の淨飯大王の許へも聞えて參りました。王は六年の間太子のことを心配してゐられたので、今佛として崇められてゐる太子の噂を聞くと、飛び上りたい程の喜びを感じました。それで優陀耶といふ、太子とは仲よしであつた若者をつかはして、本國に歸つてありがたい佛の姿を人々に見せてくれと傳へられました。

『お釋迦様、王様は御高齢でございます、何卒一日も早く歸つて王様のお心をなぐさめてやつて下さい。』

『ありがたう、それでは七日のうちに私は國に歸つて行きませう、お前は先づ歸つて王様にそのことを申傳へて下さい。』

この傳言をきかれた王様の喜びは一方ではありません。

『なに七日……』子供のやうに指を折つて、

『お、私は六年前の悲しみを、喜びとして迎へることが出来る。七日だ、もう七日だ。さあ、皆の者、心をつくして歓迎の仕度を急いでくれ。』

御殿は歡喜にあふれました、人々は御殿の掃除やら、飾りやら、幡をたてるやら、車をそなへるやら、上へ下への大騒ぎを初めました。

この騒ぎの中に一人深い悲しみと、うらみを胸に抱いて泣き伏してゐられる方がありました。それは六年前太子に捨てられた耶輸陀羅姫でした。

太子に捨てられた當時の姫のなげきはよその見る眼も氣の毒なばかりでし

た。毎日忘形見の羅睺羅様をその胸に抱いては、太子の無情をうらみ、自らの不幸を悲しんでをられました。けれ共、年月がながれて行くにしたがつて

そのかなしみも次第にうすらいで参りました、そして今では太子のことはすっかり忘れて王子の養育をたのしみにしてその日々を送つてをられたのでした。

つてこられるといふことを聞いたので、一旦忘れてゐた恨みと、悲しみが再び心のうちに燃えあがつて來たのでした。



「一人の女の運命を、衣をさくやうにふみにじつて、今更尊い教をといたとして、それは何にならう。若しも本當に人の心のなげきを知つてゐられる方ならば、再び自分の國に歸らない方がいゝ。あの方はまた私を苦しめるためにお出でなさるのだ。六年前にあれ程苦しめ、今また苦しめようとなさる。何といふつれない方だらう。おゝ、私はどんなことがあつても、この室を出ては行かない。」と、堅く決心なさいました。

御殿の準備は悉くとのひました。王様は今日か、明日かと指折り數へて、太子のお出になるのを待ち受けてをられました。

いよゝその日が参りました。お釋迦様は大勢の弟子達と一所に生れ故郷にお歸りなさいました。見るものは皆なつかしいものばかりでありました。今更六年前のことを考へると、自分ながら變つた姿に、ひとりではゝゝるま

れました。

沿道には國の人々が、出家遊ばした太子様のお姿ををがまうとして列をつくつて待つてゐました。が、やがてお釋迦様の一行がさしかゝると、人々の期待は忽ち破れてしまひました。どんなに立派になつてお歸りなされたかと思つたのに、破れた衣を着、手に鉢を持ち、洗足のまゝで、一見乞食と少しもかはりがありませんでした。

人々の口からは忽ち嘲りの言葉や笑がもれました。けれ共、お釋迦様は少しも氣にとめようとなさいませんでした、そして靜かに町を通り過ぎて、宮城近くの尼俱盧陀林で、しばらくの間、お休みになりました。

お釋迦様の汚らしい姿を眺めた王様は、非常に悲しまれました。そして「久々の歸國であるのに、お前は何故そのやうな見苦しい服装をしてゐるの

です、父を喜ばせるために何卒身装をかへて下さい。」と申しました。けれ共、お釋迦様はそのことをしりぞけ、又、迎への駕もさへぎりませんでした。

「久々でお眼にかゝつて大變嬉しく思ひます。悲しみの種は今喜びの實を結んで歸りました。その實を、あなた様に差上げたく存じます。」そして再び駕をことわりながら「何卒、そのまゝにして下さい、こゝろの世を治むる者は、昔に出られた佛の行ひに従はなければなりません。明日お宮をたづねますから、今日は一先お歸り下さい。」と申しました。

そしてその翌日は、弟子達と一所に鉢をさゝげて人々の門に立つて食を乞ひ、靜かに宮城にお出になりました。

その日から、お釋迦様は人々をあつめて、ありがたい佛の教へをおとさになりしました。すると、昨日まで乞食のやうにあなどつてゐた人々は、その深

い教へに知らずく心を奪はれて、今は全くお釋迦様の高い徳を崇め、尊ぶやうになりました。

王様ははじめて我が子が、世にもまれなえらい出家となつて歸られたことを知りまして、そこで室に閉ぢこもつて、顔をお出しにならない姫に使を送られました。

「王様からのお使でございます。」と、使者は姫の室に參つて申上げました。「今朝程太子様は御修行からお歸り遊ばされて只今御説教なされてございます。皆様御對面なされてお出ででございます、何卒姫様にもお出まし下さいませやうとのお傳へでございます。」

「私は病のために、そこへは參りませぬと、申上げてくれ。」と、姫様は、するどい言葉で返されました。そして使の姿が見なくなつた時、姫は室に倒れ

てヨ、ヨと泣きくづれました。

姫君のお心をさとりになつたお釋迦様は、御説教を終へてから、舍利弗と目連の二人を連れて、姫君の室に參りました。

「お前達はどんなことがあつても黙つてゐなければならぬ、私が姫と會ふのは姫の苦しみを救ひたいためである。」

お釋迦様がお室に參つた時、姫はさめくと泣いてゐられた時でした。ふと涙を一杯ためた眼をあげた時、姫は世にもまれな、尊い太子の姿を見うけたのでした。

「お、この方こそ、私をこんなに苦しめた憎い方だ。」と、思はうとしてもいつか不思議の光と力とが心にはたらいで、次第に今までうらんでゐた自分の心が、やはらかく、優しくとけて行くのでした。姫の眼は次第になつかし

さと、慕はしさに輝いてゆきました、

『お、この方は私以上のかんなんと苦しみを經ていらしたのだ。世の中のあらゆる人の悲しみと嘆きを救ひなされるために、御修行なされたのだ。私がこの方を恨んでゐたのは本當に愚かであつた。』

かう思ひなされると、姫君は他人の二人の弟子のゐることなど、かへりみる事が出来ませんでした。にはかにお釋迦様の膝にとりすがつて、たゞ言葉なく泣きくづれました。

『私はあなたに許しを乞はなければなりません。』とお釋迦様はやさしい、なさけある言葉で申しました『よく操をたてて、稚い子を育ててくれました。』そして、更に、ありがたいたさとの道をお説きなさいました。

今や、姫君の心には愁ひら悲しみもありませんでした。それまでの愁ひや

悲しみは、喜びとなつて胸に歸つてきました。そして自ら進んでお釋迦様のお弟子とられました、これが婦人で佛の弟子とられた初めの方でございます。

お釋迦様の教へは父君の王様を初め、下々の民にまで忽ちひろがつて、佛弟子を志願する人は幾百人、幾千人と數へるやうになりました。當時印度では理髮師は首陀といふ一番下の階級に見られて、人並の體遇をうけることが出来ませんでした。けれ共お釋迦様の教へには上下の區別は少しもありませんでした、王様も理髮師も少しも變らないのでした。お釋迦様は喜んで優婆離といふ理髮師をお弟子になさいました。その外、王子の羅睺羅も叔父君の波羅提夫人も、皆佛弟子となつて、これまでの榮華の生活をきつぱりと捨ててしまひました。

このやうに全國をあげて、お釋迦様の教へに従ふやうになつたので、迦毘羅衛國は世界無類の美しい、平和な、光明に輝いた理想國と化したのですが、これをよいことに思つたのは、隣國の毗盧釋迦王でした。ある日、大兵を率ゐて迦毘羅衛國を攻め亡ぼし、お釋迦様を初めその弟子達を一人残らず、殺したり、傷つけたり、國を追放してしまひました。

今や、全國には悲しみがみちあふれました。今日までの極樂淨土は一夜で地獄と化してしまひました、けれ共お釋迦様は決して狼狽しませんでした。

『正しき生活をしようとするものは常に現世に於て虐げられるもので、その苦を忘れ、その悲しみをきりぬけて進むところに心の淨土があるのだ。』と、お釋迦は申しました。『私は今お前達によく言つておく。人間の欲望程恐しいものはない。この欲を殺さない中は人間は人間同志殺し合つたり、苦しめ合

つたり、唾み合つたりしなければならぬ。毗盧釋迦王は、自分の權勢慾に眼がくらんで、私達の國を奪つてしまつた。が、誰か、彼の幸福を保證することが出来よう、奪ふものは又誰かに奪はれる、他人を苦しめる者は、又他人に苦しめられる、これは自然の深いおきてである。時は後にそのことを教へる。私達はこのやうな不正な生活をしてはならない。私達はたゞ正しき生活に生きなければならぬ。出家は苦しまなければならぬ、その苦しみの中に民の救ひがあるのだ。』

そしてお釋迦様を始め、多くの弟子達は國を追はれて、摩揭陀國に參り、ある長者の招ぎに依つて祇園精舎にお出でになりました。

それから後お釋迦様の教へは四十五年の長い間續きました。この間、お釋迦様はどのやうに、人々に教へを説かれたか、それをお話いたしませう。

七 盲人と象の話

象に追はれた一人の男——子供を失つた女とお釋迦様——盲人の争ひ——萬燈より明るい貧しい女の一燈——お釋迦様の往生

その一

「ある一人の男が、象に追はれて夢中で野原を逃げて行つたのです。」と、お釋迦様は學問のない人達に話されました。「何うかして助かりたい」と思ひながら、どん／＼逃げて行くと、野の真中に、一つの井戸があつたのです。やれ、嬉しや、これで命が助つたと思つて、井戸にたれ下つてゐる木の枝に

ぶらさがつてゐました。ところが、そこへ黒と白の二匹の鼠がやつて来て、その木の根をポツリ／＼齧り初めたのです。これはとんでもないことになつてしまつた、早く井戸を飛び出さなければならぬと思つて、ひよいと、井戸から顔を出すと、驚くまいことか、四匹の毒蛇がぐる／＼井戸を巻きつけて、今に出て來たら、一度に噛んでやらうと身構へてゐるのです。而もその四邊は一面の火となつてゐました。やれ／＼これはますます大變な事になつた、仕方がない井戸の底にかくれてゐなければなるまいと、ふと水を見る時、仰天してしまひました、水の中には毒龍がゐて、落ちて來たら一呑にしてくれようと、眼を光らして身構へてゐるのです。男はほと／＼弱つてしまひました。今は助かる術はないと絶望してしまひました。丁度その時、その樹に巢をくんでゐた蜂達が歸つて來て、甘い蜜をその男の口におと

してよこしました。すると、男はえも言はれぬ味にすつかり心を奪はれて、少し前の恐しさを忘れ、自分の身に何ういふ危難が迫つてゐるかも知らずに、たゞ夢中になつてその密を吸ふてゐるのでした。』

『さて皆様』とお釋迦様は申しました『これは一つの例話でございますが、信心を知らない人間の生活も丁度このとほりでございます。廣い野といふのは智慧くらしい世の中のこと、象はその世の中の變り易いことをあらはしてゐるのです。井戸は生と死で、樹の根は人の命です。二匹の鼠は晝と夜で、四匹の蛇は私の身體のことです。蜂は人の悪い考へ、火は老病、密は五欲と言つて、眼に見、耳にきき、鼻にかぎ、口に味ひ、身體にふれる喜びをあらはしたもので、そして最後の龍は死にたとへたものです。人は丁度、このやうないろ／＼な苦しみや、なやみや、慾にとりかこまれて生きてゐるのです。そ

れで、この一切のものを忘れて、佛様に取纏らなかつたら、人は一生涯、苦しみなやみと慾からはなれて清い生活をする事が出来ません。だから皆様佛様のお手にすがらうとするなら、八つの正しい行をしなければならぬのです。』

このやうに判り易い例をひいて、じゆん／＼と、深い教へをおとさになるのでございました。

その二

ある村に一人の女がゐました。非常にやさしい美しい心の女でしたが、不幸なことに、寶のやうに可愛がつてゐた子供が、病氣のために死んでしまいました。あまりの悲しみのために、女の心はすつかり亂れてしまひました。

そして死骸を抱いたまゝ子供の名を呼びつけて村から村へさまよひ歩いておました。そこへ丁度お釋迦様が弟子達と一所に托鉢をなされて通りかゝりました。

お釋迦様はその女のあり様を見て、

『お前はその子を蘇生したいと思つてゐるのでせう。』と申しました。

『はい、御出家様、この子を何卒生かして下さい。この子が生きかへらなかつたら、私も一所に死んでしまひます。』

『その嘆きは道理なことです、では私が蘇生さしてあげませう、だが、この子を蘇生らすためには、香と火が入用です。これから人の家を訪ねて香と火をお持ちなさい。』

『おゝ、そんなこと、わけないことでございます、直ぐ持つて参ります。』

『一寸お待ちなさい、だがその火は人の死んだことのない家の火でなければいけませんよ。』

あはれな女は喜んで火を求めに村に参りました。

『何卒私にお火を恵んで下さい。』と、彼女は一軒々々村の家を訪ひ歩きました。

『え、え、差上げますとも。』

『あなたの家では誰か死んだことはありませんか。』

けれ共、どんな家でも、先祖から一人も死なない家といふものが、一軒もある譯がありません。歩きまはりまはつて、女は漸く、このやうな死のかなしみは、自分一人だけのものではない、凡ての人が味はつて来たものであることをさとりました。かの女は初めて夢からさめました。そしてお釋迦様の

許に歸つて、お教へのありがたいことをあつく感謝いたしました。

その三

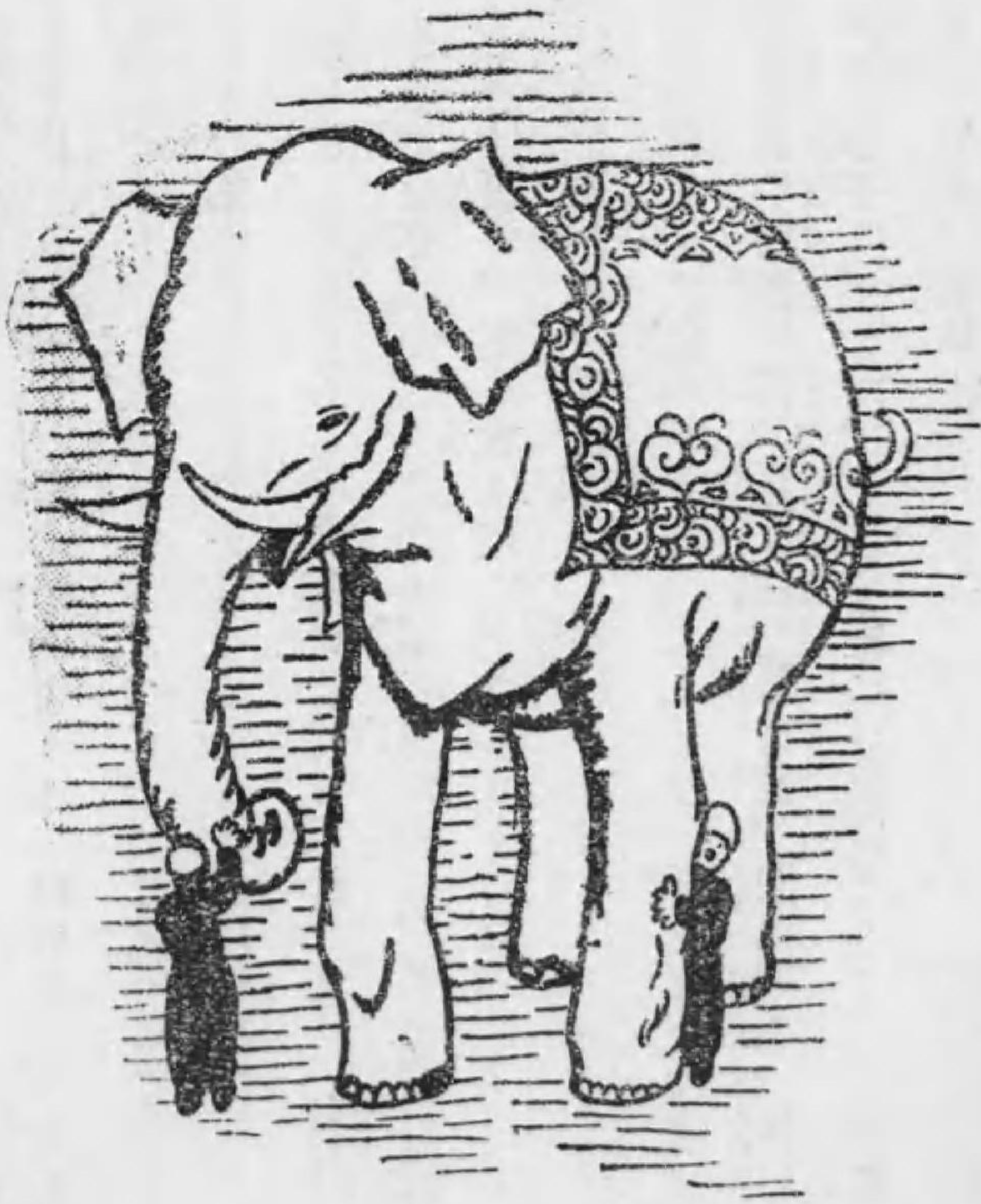
「昔、あるところに鏡面といふ王様があつたのです。」と、ある日のことお釋迦様が語られました。「何か一つ面白いことをやつて見たくて、いろいろ考へましたが、ふと、ほゝゑんで手を拍られました。

(こらく、町に住んでゐる盲目達をあつめて來なさい、それから、おとなしい一疋の象を引出して來なさい。)

と、王様は家來に命ぜられました。

大勢の盲目達が手をひかれて御殿に参りました。

(さて盲目の方々)と王様は申されました。(私は今日懸賞付で今お前達を象



にさはらしてあげよう、若し、象の形をよくあてた者があつたら、懸賞を全部その人一人にやるし、二人の時は、二つにわけて與へることにしよう、さあ、皆さはつて、象はどんなものか言つて見なさい。

盲目の人達は喜んで左右から、象をかこんで探り初めました。ある者は足にさはり、ある者は胴にさはり、ある者は象の鼻に、ある者は頭に、ある者は牙に、ある者は腹に、ある者は尾に、さはりました。

さて王様が象を歸して、盲目達に、象はどんなものであつたかとたづねると、鼻にさはつたものは轆のやうだつたと言ひ、牙をなでた者は杵のやうだと答へ、足にさはつた者は白、尾は紐、股は樹、腹は壁と、各自に自分の信じてゐることを申し上げました、そして終には懸賞ほしさに、王様の前を忘れて、がや／＼とわめき初めました。

『盲目の争ひは、佛の道を知らない人の世渡りと同じく、間違つたものです。』と、お釋迦様は申されました、『人々が佛の教へを守ると、決して争ひは起りません、何故なら人々はたゞ一つの眞理に従つて生きて行くことが出来るからです。』

その四

あるところに一人の貪しい女の人がゐました。彼女はありがたいお釋迦様の教へを聞いて、自分も何うか皆さんのやうにお釋迦様に施しをしたいものだと思へました。けれ共、貧乏であつたために、何も差上げる事が出来ません、仕方がないので、市中を乞食して一錢のお錢をもらひました。『何卒、このお錢で油を下さい。』

女は身をすぼめて油屋の店に立ちました。

「おや、一錢ですか。」と、油屋のお主婦さんは、お錢と女の顔を見くらべて言ひました「こればかりの油では一時も燈りませんよ。」

女は顔を眞赤にして、しばらくの間ためらつてゐましたが、やがて、自分の恥しい身の上や、お佛様に油を差上げたいために、市中を乞食して歩いたことを語りました。

「まあ、左様でしたか、そんなに感心なお心でしたら、お錢は入りません。この容器に一杯油をさしあげませう。」

女は喜んでその店を出ました、そしてすぐその足で祇園精舎に行つて、そのことを申し上げ、

「何卒この油を、萬燈の一つにお加へ下さいませと、ありがたい仕合でござ

います。」

お釋迦様は、この貧しい女の志を大變お喜びなさいました。

「ありがたく頂きませう、佛様はきつとお喜びなさいませう、あなたはこの次の世にすぐれた智慧を持つて生れて來るでせう。」

お釋迦様はすぐその油を弟子に命じて燈させました。すると何うでせう、その明るさは、他に數倍し、夜が明けて他の燈が消えても、その小さい燈だけは燃え輝いてゐたとのことです。

お釋迦様がおなくなり遊ばしたのは二月十五日でした。お年は八十歳でゐらせられました。四十五年の永いく教化に依つて、印度全國は草木に到るまでお釋迦様の教へをきかぬものがない位でした。まことに、お釋迦様の教へは二千五百年後の今日尙さんぜんと輝いて、私達の生活を正しい道にみち

耶蘇様とお釋迦様
びいてをります。(をはり)

耶蘇様とお釋迦様 終

不許複製

大正十一年七月一日印刷
大正十一年七月五日發行

一寸法師畫
耶蘇様とお釋迦様

定價一圓二角

發行者

增田 義一
東京市京橋區南鍋町二丁目十五番地

印刷者

渡邊 八太郎
東京市牛込區榎町七番地

發行所

東京市京橋區南鍋町二丁目十五番地
實業之日本社
電話銀座三〇三、三〇四、三〇五、三〇六
振替口座東京三二二六
日清印刷株式會社

定價各一圓 郵稅各六錢
 愛子叢書 四美裝函入

□第一篇 眼 再版 島崎藤村先生著

□第二篇 小さな鳩 再版 田山花袋先生著

□第三篇 めぐりあひ 改版 德田秋聲先生著

□第四篇 八つの夜 改版 與謝野晶子先生著

□第五篇 人形の望 改版 野上彌生子先生著

□童話集 幼きものに 廿二版 島崎藤村先生著 定價八十錢 郵稅四錢

□童話集 ふるさと 十六版 島崎藤村先生著 定價一圓 郵稅四錢

□童話集 蟻のお國 再版 長田秀雄先生著 定價一圓七十錢 郵稅八錢

□繪入どんたく 廿九版 竹久夢二先生著 定價一圓 郵稅四錢

□滑稽短篇集 笑の爆彈 廿六版 日本少年主筆 松山思水先生著 定價七十五錢 郵稅六錢

□お伽べルの音 十版 小學男生主筆 濫澤青花先生著 定價八十錢 郵稅六錢